平城宮北辺地域
発掘調査報告書

奈良国立文化財研究所

序

1959年に平城宮跡の本格調査を開始して今年で22年目を迎える。この間、平城宮及び平城京内の街路や邸宅遺跡の調査に多大の成果をあげ、平城宮や京に対する理解をかなり深めることができた。しかし、宮域の北辺については調査の機会に恵まれず、隔靴掻痒の感を免れなかった。近年この地にも宅地化の波がおしよせ、無秩序な開発が進行する一方、北方の林間中に点在していた土塁状の高まりが『続日本紀』にみえる「松林宮・松林苑」の区画であるとの説が提示され、これらを含めた宮北辺地域の性格を明らかにするための調査が緊急の課題となってきた。こうした折に共栄建設株式会社がこの地に住宅地開発を計画、関係諸方面の尽力により事前調査を実施する運びとなった。調査地の東部は、かつてブロック製造工場として若干埋立てられたが、以前は市庭古墳後円部の西側の濠跡を明瞭に示す水田であった。また、最近宮の北に接したこの地域が平城宮大蔵省倉庫群の占地であったとの説があり、西半分はそれに関連した遺構も期待できるところである。調査内容については各章に詳しいが、調査成果からみてこの地域が宮と関係した公的な地域と推定されるに至った。

宮域の北辺に苑地をおくことは中国の都城に伝統があり、平城宮と関係の深い唐長安城には宮の北辺をとり巻くように東内苑、西内苑、禁苑の三苑があった。これら苑地には無数の苑池・築山などとともに多くの楼閣等があった。こうした制度をどこまで移入したかについては問題であり、考古学的調査は未開拓に等しい。この観点から今後は調査の網を宮の北辺全体に拡げてゆくことが必要であろう。本報告書がそうした動きに一石を投ずることになれば望外の幸せである。

1981年3月

奈良国立文化財研究所長

坪　井　清　足

目　次

I 序　章

1．調査の経過……頁1
2．調査の概要……2
3．写真測量……3

II 遺　跡

1．遺跡の概観……4
2．市庭古墳の遺構……6
3．奈良時代の遺構……10

III 遺　物

1．埴　　輪……12
2．瓦　　塼……14
3．土　　器……16

IV まとめ

1．平城京と宮の庭園遺跡……17
2．史料からみた平城宮大蔵省……20
3．結　　語……22

例　言

1．この報告書は、共栄建設株式会社の依頼により、1980年６月から同年10月にかけて調査した同社の住宅建設予定地（奈良市佐紀東町字塚本）の発掘調査に関するものである。調査にあたっては、同社社長笹川清太郎、開発課長松原繁両氏に御尽力いただいた。

2．調査は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当し、森郁夫、田中哲雄、金子裕之、毛利光俊彦、清水真一、佐藤信、内田昭人が参加した。葺石の測量及び規模復原には、同研究所埋蔵文化財センター木全敬蔵、伊東太作、西村康の協力を得た。

3．本書の作成は、岡田英男の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議をもとに次のように分担執筆した。Ⅰ－１森郁夫、Ⅰ－２金子裕之、Ⅰ－３内田昭人、Ⅱ－１・２金子裕之、Ⅱ－３清水真一、Ⅲ－１立木修、Ⅲ－２毛利光俊彦、Ⅲ－３森郁夫、Ⅳ－１田中哲雄、Ⅳ－２佐藤信、Ⅵ－３金子裕之

4．遺構・遺物の写真は、佃幹雄が担当し、図版作成には、八幡扶桑、渡辺衆芳、池田千賀枝が協力した。航空写真の撮影及び図化はアジア航測株式会社が行った。

5．挿図１使用の地図は、国土地理院1972年作成二万五千分之一「奈良」「大和郡山」の一部である。

6．本書の編集は、金子裕之が担当した。

図　版

巻　首　平城宮北辺地域航空写真
PL.1　6AFV－J･K区全体図
PL.2　6AFV－J･K区航空写真
PL.3　発掘区全景
PL.4　市庭古墳・周濠
PL.5　市庭古墳・葺石
PL.6　市庭古墳・葺石
PL.7　円筒埴輪列
PL.8　奈良時代の遺構・全景
PL.9　園池
PL.10　井戸・建物・暗渠
PL.11　土坑・溝
PL.12　埴輪
PL.13　軒瓦
PL.14　軒平瓦
PL.15　軒丸瓦・刻印・土器
PL.16　絵図にみえる宮北辺
PL.17　絵図にみえる宮北辺
巻末折込　平城宮北辺地域（6AFV－J･K区）実測図1/200

挿　図

		頁
fig. 1	調査地位置図	1
2	平城京跡発掘地割図	2
3	6AFV区発掘区	2
4	古墳内濠埋土の壁削り	2
5	ロープウエー方式の準備	3
6	ステレオカメラによる葺石の撮影	3
7	遺跡周辺の歴史的環境	5
8	SX2153据えつけ状況	6
9	葺石実測図	7
10	SG2150埋土土層図	8
11	市庭古墳復原図	9
12	SE2163	10
13	SG2162土層図	10
14	SK2158	11
15	SD2157	11
fig.16	埴輪実測図	12
17	埴輪実測図	13
18	軒丸瓦	14
19	軒平瓦	15
20	土器実測図	16
21	第126次調査SG2162	17
22	第56次調査SG520	17
23	平城京と宮の園池遺跡	19
24	平安京宮城図（九条家本）	20
25	関野貞・平城京及附近班田古今対比図	21
26	推定松林苑南辺築地	21
27	校倉の校木を使った井戸枠	21
28	徐松・西京三苑図『唐両京条坊考』（平岡武夫『唐代の長安と洛陽』による）	22

表

		頁
表1	撮影仕様	3
2	平城京と宮の園池	18
	大蔵省関係年表	20

表紙写真　平城宮上空から大蔵省・松林苑推定地を望む　1980.10.2撮影

平城宮北辺地域発掘調査報告書

Ⅰ．序　章

1．調査の経過

この報告書は、奈良国立文化財研究所が共栄建設株式会社による開発予定地で行なった平城宮第126次発掘調査の報告である。調査地は平城宮第二次内裏北方に所在する「平城天皇陵」に治定されている市庭古墳後円部に西接する奈良市佐紀東町字塚本である。ここは市庭古墳後円部周濠にあたり、さらに平城宮に北接する宮外官衙の存在も予想されるという重要性に鑑み、奈良県教育委員会の行政指導のもとに、受益者負担で調査が実施されるはこびとなり、共栄建設株式会社の依頼によって発掘調査を奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当したものである。

建設用地は、コンクリートブロック工場の跡地のほとんどを占め、面積は約6745m²である。発掘調査は、南北２棟に分けて建設する集合住宅の建設予定地のそれぞれに、主要なトレンチを設定し、その南、既存民家への進入路に関わる地域には小トレンチを設定して行なった。調査面積は2500m²である。

調査は昭和55年６月23日から同年10月18日までの約４ケ月の期間を要した。用地は工場建設時の整地面がコンクリートで固められており、バックフォーを使用して排土した。6AFV-K区は比較的浅かったが、Ｊ区は深さが一定でなく、深いところでは旧水田面までの整地土が約 1.5mあり、土量は厖大であった。また、用地の形状に制約され盛土地にも限度があったため、ブルドーザーをも使用した。さらにバックフォー２台とブルドーザー、ダンプカー各１台を使用したことも一再ならずあった。調査期間の関係から、重機稼働中、一方で人力による調査を進めることもあり、調査地は大土木工事現場さながらの様相を呈した。

調査の結果、奈良時代の園池、掘立柱遺構、溝、土坑、井戸、そして市庭古墳後円部周濠、外堤、外堤上に据えられた埴輪列などを検出した。園池は調査当初、古墳外堤を隔ててごく一部を検出したにすぎなかったため、トレンチを西に拡張させねばならず、プレハブ現場事務所を撤去して調査を進めた。この園池は古墳周濠に沿っており、市庭古墳外濠を奈良時代に一部修造転用したものである。

このような、予想もされなかった園池の検出により、奈良県教育委員会は共栄建設株式会社と協議の結果、園池汀にかかる部分について一部設計変更を行ない、遺構の保存をはかることとなった。

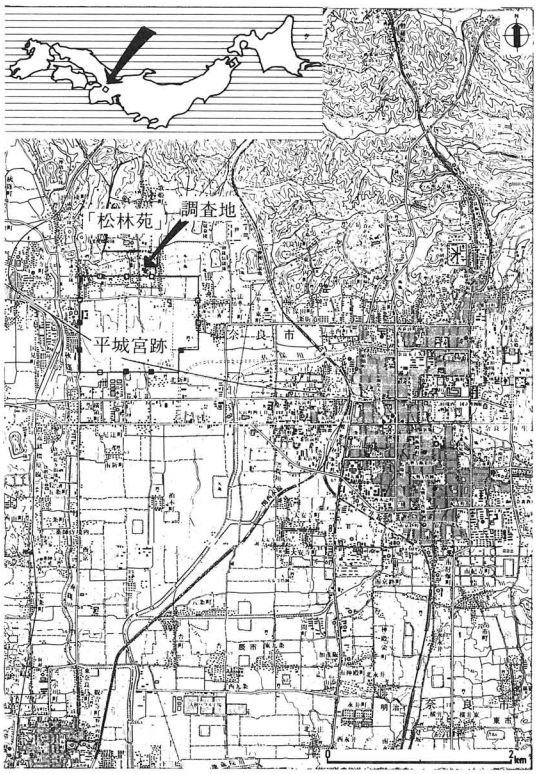


fig. 1　調査地位置図

調査日程

6.23～7.8	バックフォー、ブルドーザーによる表土排土。
7.15	動力用電気配線工事。ブルドーザーによる排土。
7.16～9.26	遺構検出。
8.19	6AAN-E区トレンチ写査撮影。遺形実測。
8.22	6AAN-F区トレンチ写真撮影。遺形実測。
8.25～30	バックフォー、ブルドーザー、ダンプカーにより6AFV-K区トレンチ拡張区、6AFV-J区トレンチ北半部排土。
9.17	6AFV-J区トレンチ写真撮影。
9.18～9.20	バックフォーにより古墳周濠部掘削。
9.27	現地説明会。
9.29	測量用基準点設定。
9.30	空中写真測量（ヘリコプター）。
10.1	第１・２トレンチ写真撮影。
10.2～4	第１・２トレンチ土層図作成。
10.3	SE2163枠板とりあげ。
10.4	第１トレンチ細部写真撮影。
10.6	周濠土層図作成。
10.9	葺石写真撮影。
10.16～17	葺石平面立面写真測量。
10.18	遺構養生。調査完了。

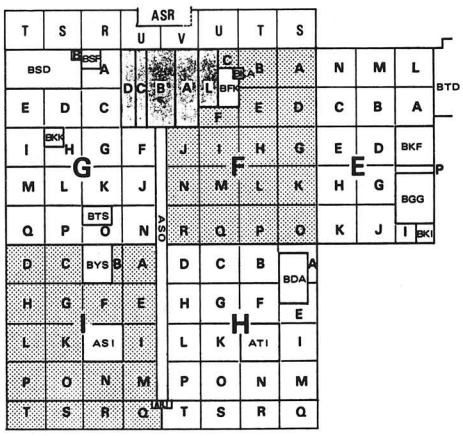


fig. 2　平城京跡発掘地割図

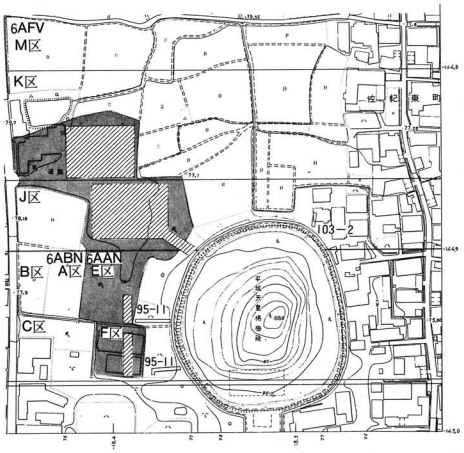


fig. 3　6AFV区発掘区

建設予定地
発掘区

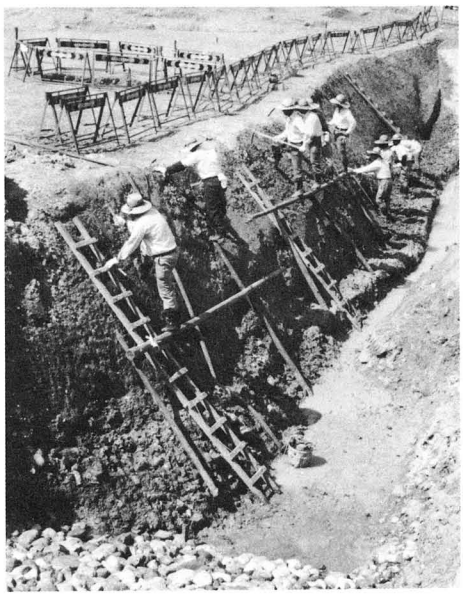


fig. 4　古墳内濠埋土の壁削り

2．調査の概要

調査にあたって地区を設定した。当研究所では、従来から平城宮・京の地割をアルファベットで記号化し呼称としてきたが、平城宮の北辺については大規模な調査がなかったこともあり、便宜的に宮の地割を延長して使用してきた。しかし、今後この地域の調査が大規模化することに備え、独自の地区名を設定した。ただし、記号数に限りがあるため、従来の左、右京の地割を北側に延長し、宮の中軸線で分割した(fig 2)。こうして設定した大地区をさらに20余の中地区に分割した。今回の調査地はこのうち6AFV-J・K区と6AAN-E・F区にまたがる(fig 3)。ここは歌姫町から宮の第2次内裏地区まで、南北にのびる奈良山丘陵の一支丘上の東縁に近い緩斜面にあたり、近世、「平城天皇陵」に治定された市庭古墳後円部の西側である。調査は、市庭古墳の濠と外堤の規模を確認することと、奈良時代における利用状況を知るため、4ケ所に発掘区を設けた。古墳の濠にかかる6AAN-E・F区、6AFV-J区の南半は、黄褐色粘質土を基調とする整地土が厚く、奈良時代の遺構面を決めるのに若干困難を伴った。外堤にあたる6AFV-K，J区の北半は浅く、旧水田耕土の下に丘陵の基層である大阪層群の茶褐色礫層がある。遺構はこの面で検出したが、開田工事等によって部分的に遺構面が削られ、外堤上の円筒埴輪列はJ区南西部分を除いて大半が失われていた。しかし、ここで市庭古墳が2重の濠をもつこと、この外濠を奈良時代に園池に転用していることを確認し、園池に付随した井戸・掘立柱遺構等を検出したことは大きな収穫であった。園池SG2162の検出時点で改めて問題となったのは、内濠がいつ埋められたかということである。宮域に含まれた前方部は、宮の造営時に破壊されたが、後円部は墳丘の一部が現存し、その西側には濠の名残りの地割を留める。SG2162が外濠を利用していることから、内濠も同様の可能性が考えられたのである。しかし、この推定は調査の進行によって否定された。これは濠の位置にあたるJ区や6AAN区で奈良時代の遺構面を確認したことと、濠の底まで掘削し、埋土の断面(fig. 10土層図)を観察したことによる。奈良時代の遺構面から濠の底まで約3m、底近くに木の根等を含む約40cmの灰色粘土層があるが、他は全て黄褐色系粘質土の整地層である。しかも、大半の整地が墳丘側からなされたことを示す。これは濠の埋立てが墳丘を削って短期間に実施されたことを物語っている。6AAN区ではトレンチが狭かったため、埋め方は分らなかったが、埋土の状況は6AFV-J区と同じであることからみて、こうした工事が前方部の整地作業と一連のものであった可能性がある。

3．写真測量

遺構の実測は主に写真測量によった。写真測量とは、被写体と適当な距離をおいた2個のカメラにより撮影し、その実体写真をもとに被写体の3次元測定をおこなう技術を総称し、飛行機などからカメラを真下に向けて撮影した写真を室内で実体視し、地形・地物の判読や地図を作成する方法である。写真測量は精度に均一性があり、撮影時の状況を随時再現でき、野外作業が極めて短縮されるという利点をもつため、最近では大規模発掘の遺構の測量に多く利用されている。特に今回の調査のように石敷や石組が多い遺構には有効な手段である。写真測量を行なうには、予め標定点を遺構に設置し、位置と標高を計測した後空中から撮影を行なう。空中撮影の方法は、クレーン、ロープウェイ、ヘリコプター、セスナ機等にカメラを搭載して撮影を行なうものであるが、遺構の性格や道路・地形等の立地条件によって撮影方法が決定される。

今回の調査地は大蔵省推定地の一画に含まれ、その関連施設の探究も調査の眼目となっているため、北は「松林宮」北限から、近くは市庭古墳の全景に至る広範囲の展望が可能な高度をとる必要があった。このため、遺構全体とその周囲の状況はヘリコプターにカメラを搭載し、空中撮影を行った。また墳丘斜面の葺石部分の撮影は石が小さいため、ヘリコプターでは大縮尺を得るための高度まで降下することができない。また、実測の効率を高め、迅速性を計る必要があり、遺構の養生も兼ねて当研究所で開発したロープウェイ方式による撮影を行った。この方法は二本のタワーを結ぶワイヤーロープにカメラを吊り下げてオーバーラップをとりつつ遺構を連続撮影しながら進むシステムである。カメラと並列して搭載されたＴＶカメラがファインダーの代替をしているため、モニターが可能であり、質の高い写真が得られ、平面図も大縮尺に耐え得る成果が期待できる。立面図は地上撮影によった。

fig. 5　ロープウェー方式の準備
カメラが真下を向くように調整している

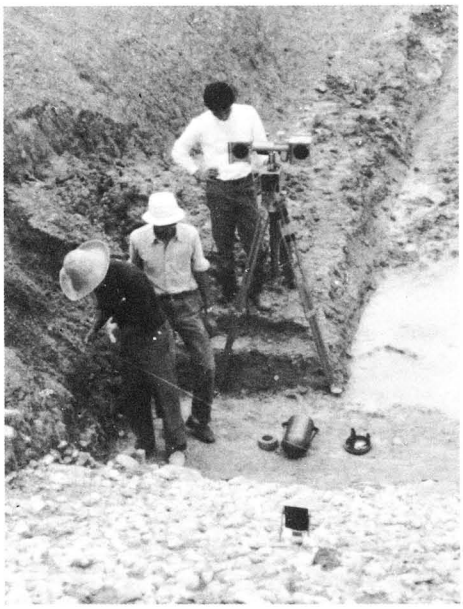


fig. 6　ステレオカメラによる葺石の撮影

表１　撮影仕様

	空中撮影	ロープウェイ方式撮影	立面撮影
撮影日時	1980年９月30日	1980年10月17日	1980年10月17日
カメラ	ツアイスRMK	ハッセルブラッドMK-70	SMK-40、SMK-120
レンズ	150mm	60mm	60mm
フィルム	コダックXX	コダックplus-X	AGFA-GEVAERT
撮影縮尺と高度	1／225… 34m 1／250… 38m 1／800…120m	1／20…6 m	ガラス乾板 1／50～1／100
露出	1／400秒	1／250秒	1／2～1／25秒
絞り	8	8～11	11

II．遺　跡

1．遺跡の概観

平城宮の背後に広がる奈良山丘陵一帯は佐紀盾列（さきたたなみ）古墳群と称される古墳の分布地帯である。西から神功皇后陵、成務天皇陵、日葉酢媛命陵、塩塚、猫塚、瓢箪山、市庭、磐之媛陵、コナベ、ウワナベといった雄大な前方後円墳がならび、それらの間を埋めるようにやや規模の小さい前方後円墳や、その陪冢、その他円墳、方墳等が分布している。平城宮の造営に伴って、こうした古墳のいくつかは破壊され、地上に姿を留めない。これまで明らかになったものに、市庭古墳と第２次内裏地区の神明野古墳があり、その他にも地形や遺物の出土状況から２・３の存在が推定できる。市庭古墳は、1962，３年の発掘によって初めて前方後円墳であることを確認し、付近の字名をもとに命名したもので、現状は後円部の一部が円墳状を呈し、近世に平城天皇陵に治定された。前方部の調査に引き続き、後円部側でも住宅建設に伴う小規模な調査を実施し、これらの資料と水田の畦畔、字切図をもとに旧状の復原を試みた。[註1] 今調査区は後円部の一部と濠・外堤にかかり、市庭古墳の復原にとって重要な知見をもたらすことが期待された。

平城宮造営によって市庭古墳周辺の景観は一変した。古墳自体もくびれ部付近に宮の北辺大垣が築かれ、後円部の一部を残して以南は削平された。では宮の北側にどんな施設があったか。文献の記録と平安京宮城図、現地形との対比から、宮の北側には大蔵省の倉庫群や園池があったと推定されていたが、その位置は明確ではなかった。宮北方の林間中には従来古墳の外堤あるいは超昇寺の痕跡と考えられた土塁状の高まりが点在する。1979年に至り、橿原考古学研究所はこうした土塁が一連の築地痕跡であり、この築地による区画が『続日本紀』にみえる「松林苑・松林宮」に該当し、その規模を現存の築地痕跡と地割から東西約 0.5㎞、南北１㎞以上と推定した。その後、同研究所は西辺と南辺築地の一部を発掘し、この築地が平城宮の大垣と同規模であること、出土瓦には藤原宮からの転用瓦や平城宮軒瓦編年の第Ⅰ期の軒瓦が含まれること、以上から築成時期は平城宮の造営当初に遡る可能性を明らかにした。[註2] 当調査部も南辺築地が二重になる部分で調査を実施（123－12次）、推定南辺築地と北側に巾5.3ｍ、深さ2.8ｍの空濠を検出した。宮の北に広大な「松林苑」の存在が明らかになった結果、宮との中間地帯が問題となってきた。殊に「松林苑」南辺築地の東西コーナーの推定地が各々宮北辺の西門と東門の推定位置にほぼ一致すること、南辺築地と宮北大垣との心々距離が240.12ｍ（約800尺）であることは「松林苑」の配置が厳密な計画のもとに行われたことを物語る。岸俊男氏は、以上の知見と平安宮の例をもとに、この中間地帯に大蔵省の倉庫群が設けられた可能性を考えている。[註3] 今調査区はこの大蔵省推定地に含まれ、関連遺構が期待できよう。なお、宮北大垣から北 170ｍ、称徳天皇・日葉酢媛命陵の両古墳の南に南北巾15ｍ、東西長 350ｍに及ぶ地割がある。[註4] これが秋篠川に通じる運河とそれに連なる道路遺構とすれば、大蔵省への物資運搬という観点から重要である。平安遷都後この地に創建をみたのが超昇寺である。　平城上皇は弘仁年間に平城遷都を企てて挫折、第三皇子の高岳親王は仏門に帰依、のち超昇寺を創建と伝える。超昇寺には、本堂、法華三昧堂（『諸寺縁起集』）阿彌陀堂（『七大寺巡礼記』）があった。寺地は御前池の北とされるが明らかではない。この後、寺に関係した一族がこの池の西岸に超昇寺城を築いた。大和の戦国時代の幕開きであった。

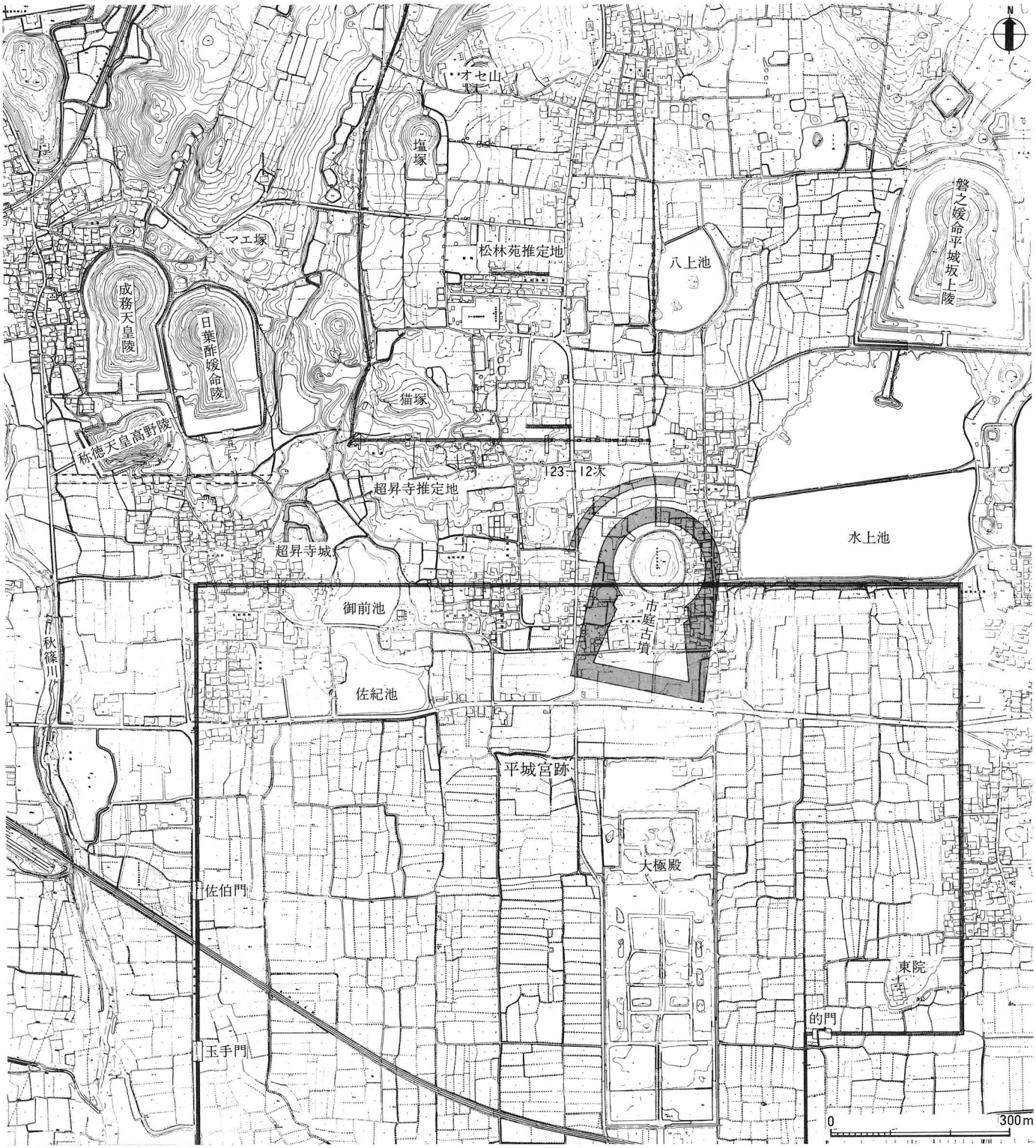


fig. 7　遺跡周辺の歴史的環境

註１　『平城宮跡発掘調査報告　Ⅶ』(奈良国立文化財研究所学報　26) 1978

註２　河上邦彦「松林苑の確認と調査」奈良県観光　277号　1979

　　奈良県立橿原考古学研究所付属考古博物館速報展示解説　17号　1980

註３　岸俊男「松林苑と年中行事」奈良県観光　277号　1979　のち『遺跡・遺物と古代史学』1980 に収録

註４　村田修三「超昇寺城」『日本城郭大系　10巻』1980

2．市庭古墳の遺構

市庭古墳ＳＸ500は奈良時代に破壊し、濠を埋立てている。この整地土の下から墳丘の一部、内濠ＳＧ2150を検出し、また外堤ＳＸ2170、外濠ＳＧ2160、埴輪列ＳＸ2153等を確認した。

ＳＸ500　墳丘は本来３段築成と推定されているが、最下段の基底部のみを検出。この基底部は地山の茶褐色礫土、茶褐色砂質土、灰色砂層を削り出して形成している。第１段のテラスを確認するために基底部斜面の東側に発掘区を拡張したが、地土を掘りこんだ奈良時代の土坑ＳＫ2158を検出したのみで、墳丘盛土や埴輪据えつけ痕跡などは確認できなかった。ＳＫ2158が示すように、この部分の墳丘は奈良時代に地山面まで削平していたようである。

ＳＸ2151(PL.５)　墳丘西斜面の葺石は、南北約4.5ｍ、東西約5.3ｍ、高さ３ｍ分を検出。古墳の破壊作業による夥しい転石が表面を覆っていた。葺石の据には大形（25～40cm）の河原石を１列、１部は２列に並べて据石としている。裾石のならびから復原した円孤は、直径 150ｍである。葺石の設置は、地山を切り土した法面に灰褐色砂土や暗灰色砂土をこめながらバラスを詰め、その上に直径15～25cmの石を小口積みとする(fig.９)。しかし崩れたり、大きくはらんだところがあり、そこでは裏ごめのバラスが露出している。傾斜角度は約28°である。以前調査した前方部の葺石は、斜面に人頭大の石を下から上へ１列に並べて区画線としている(PL.６)が、6AFV区では検出できなかった。

ＳＧ2150(PL.４)　内濠は6AFV区と6AAN区で発掘した。6AFV区では墳丘から外堤まで41ｍ、巾９ｍ（一部は６ｍ）のトレンチを設けて発掘し、葺石ＳＸ2151、2152と濠の底を確認した。ＳＸ2151と2152の裾石の間隔は29.5ｍ。濠の底は中央部分に向って緩やかに傾斜する。この底に厚さ 0.4ｍの有機物を含んだ暗灰色粘土、灰色粘土層があり、この層以上奈良時代の遺構面までの2.6ｍは全て黄褐色系粘質土の整地層で、大部分が墳丘側から埋立てられている(fig.10)。遺物は埴輪片の他にはなかった。この状況は6AAN区でも共通し、前方部側の調査所見とも一致するものである。従って後円部側の内濠も平城宮造営に伴って、墳丘を切り崩した土で埋め立てられたものと考える。濠底の海抜高は6AFV区が74.0ｍ、6AAN区が74.5ｍを測る。後者が前者より 0.5ｍ高いのは発掘区の位置が墳丘裾に近いためであろう。前方部側の調査では東南隅と西南隅付近で濠の底を確認しており、その標高は71.7ｍである。これは6AAN区とは2.8ｍ、6AFV区とは2.3ｍの差がある。西南隅付近と6AFV区との距離は約 250ｍであるから、濠の底の傾斜は約31′である。

ＳＸ2170(PL.４)　外堤は褐色粘質土や地山の茶褐色礫層を削り出して形成する。南北約40ｍ分を検出した。埴輪列ＳＸ2153の周辺を除き、表面の大半は開田工事によって削られ、地山が直接露呈している。東西両斜面の葺石ＳＸ2152とＳＸ2161の裾石間の距離は32.5ｍ。発掘区外堤表面の旧傾斜は、埴輪列ＳＸ2153の埴輪の底面の傾斜と葺石ＳＸ2161の傾斜をもとに、北から南に約 50′と推定する。ＳＸ2153の北端埴輪周辺の海抜高を基準とすると、東斜面葺石ＳＸ21

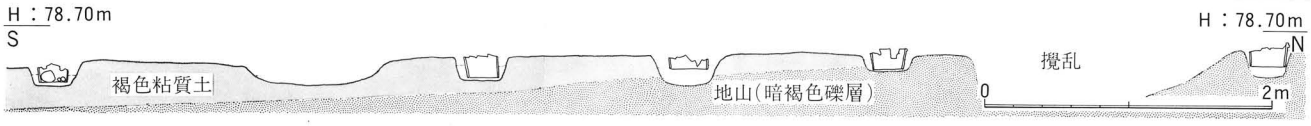


fig.８　SX2153据えつけ状況

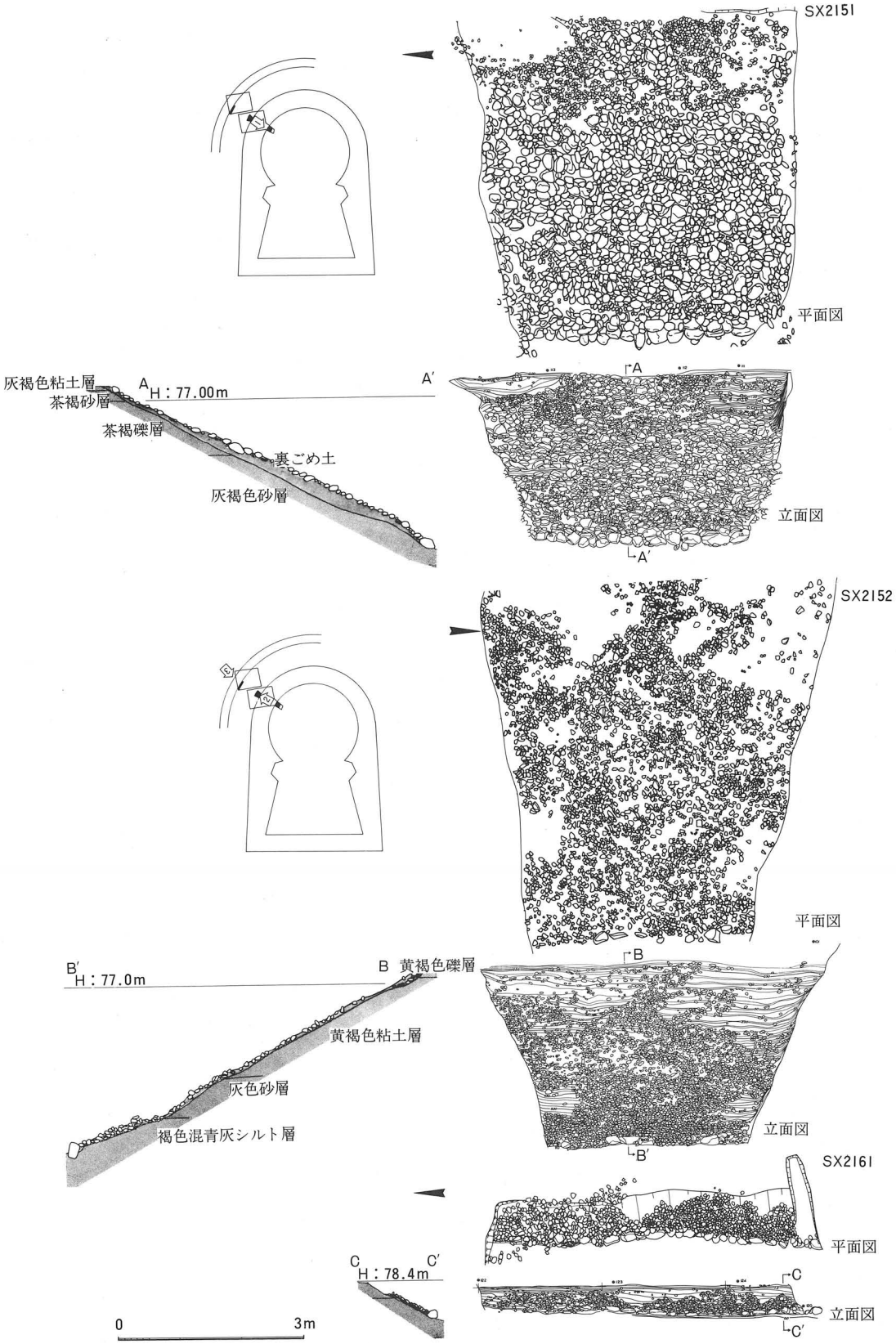

SX2151
平面図
灰褐色粘土層
茶褐砂層
A
H：77.00m
A′
茶褐礫層
裏ごめ土
灰褐色砂層
A
立面図
A′
SX2152
平面図
B′
H：77.0m
B
黄褐色礫層
黄褐色粘土層
灰色砂層
褐色混青灰シルト層
B
立面図
B′
SX2161
平面図
C
H：78.4m
C′
C
立面図
C′
0
3m

fig. 9　葺石実測図

52裾石上面との比高差は4.07m、西斜面葺石ＳＸ2161裾石上面との比高差は0.67m。

ＳＸ2153(PL.７)　外堤上に据えられた埴輪列は、保存状態が悪く、後世畑地として利用された部分に５本分の基底部が残存したが、水田として利用された部分では全て削平され、据えつけ痕跡も留めない。埴輪は約 1.4mの間隔に壺掘りして据えつけている。最北端の１点のみ、地山の暗褐礫層を掘りこみ、以南の４点は褐色粘質土を掘りこむ(fig.８)。埴輪周辺の海抜高は最北端の場合が78.6m、最南端の場合が78.55mである。

ＳＸ2152(PL.５)　外堤東斜面の葺石は東西５m、南北3～3.5m、高さ３m分を検出。人頭大の河原石を並べで裾石としているが、この一部と葺石の大半は失われ、裏ごめのバラスのみが残っていた。傾斜角度は約28°である。葺石の裾えつけはＳＸ2151同様、地山を切り土した上に若干の土をおきながらバラスを詰めている。裾石の上面の海抜高は74.53mで、ＳＸ2151の裾石より20cm低い。また裾石のならびから復原した円孤の直径は約209mである。

ＳＸ2161(PL.５)　外堤西斜面の葺石は、奈良時代の園池ＳＧ2162の洲浜下層に、南北5.2m、東西 0.8m分を検出した。地山の黄褐色礫土上に暗茶褐粘質土をおき、裾石を設置する。裾石は横長の石（20～30cm）をならべ、それ以上はバラスを葺く。葺石の傾斜角度は約30°。最南端の裾石の上面は、海抜77.93mで、ＳＸ2152のそれとの比高差は3.4mである。

ＳＧ2160(PL.４)　地山の茶褐色礫層を掘りこんだ浅い外濠で、巾は西側のたち上りと外堤西斜面の傾斜変換点との間で、約18mを測る。西斜面は素掘りで、葺石はみられない。底は凹凸があるが、地形にそって北から南に緩やかに傾斜し、最も低いＫ区南端の海抜高は 77.80mである。但し、外濠は奈良時代に手を加えて園池としており、当初の姿を復原するには検討が必要である。外濠については後円部の真北には存在したようで、6AFJ区の北東延長線上には弧状の畦畔がある。他方、西側の延長線上にあたる県道上では、1980年10月の道路の掘削工事に際して地山の下がりと灰色粘土を確認しているから、後円部の周辺には存在したのであろう。

市庭古墳の復原は、以前当研究所が試みたが[註]、当時は後円部復原に関する確実な資料が少なかった。その後、墳丘の西と北に小規模調査（95－11次、103－２次）を実施し、これに今回の知見を加えることで先の復原案は一部修正が可能となった。すなわち、後円部基底部の裾石を基準とした基底線の直径は約 150m、前方部を含めた墳丘全長は約 250m、前方部幅約 160mである。周囲にめぐる内濠は狭いところで29.5m、深さ 4.5m程と考える。以前の復原と異なる点は、後円部直径が大きくなったこと、濠が深くなったこと、一部に外濠がめぐることである。

註 『平城宮発掘調査報告 Ⅶ』（奈良国立文化財研究所学報26）1978

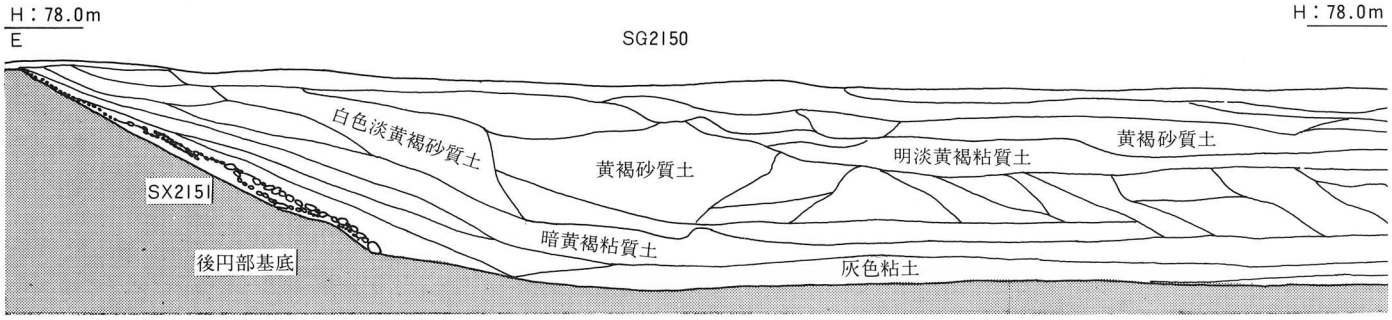
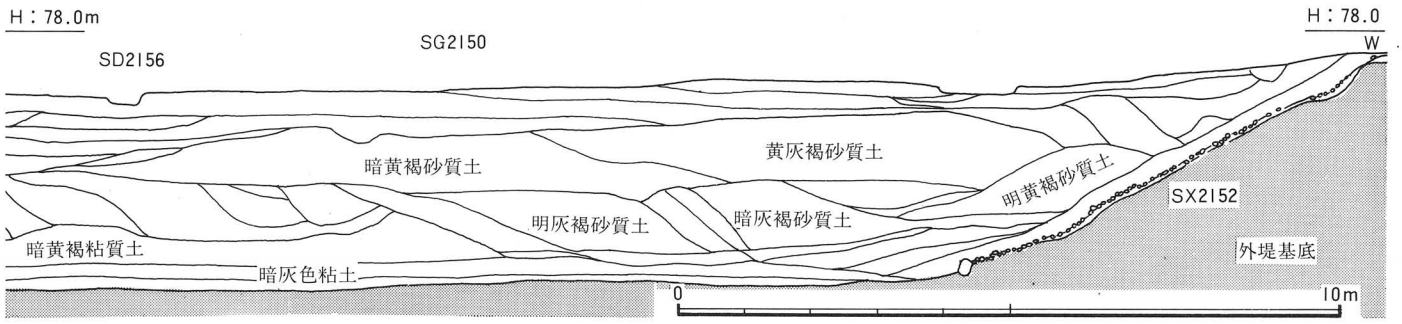


fig.10　SG2150埋土土層図

fig. 11　市庭古墳復原図



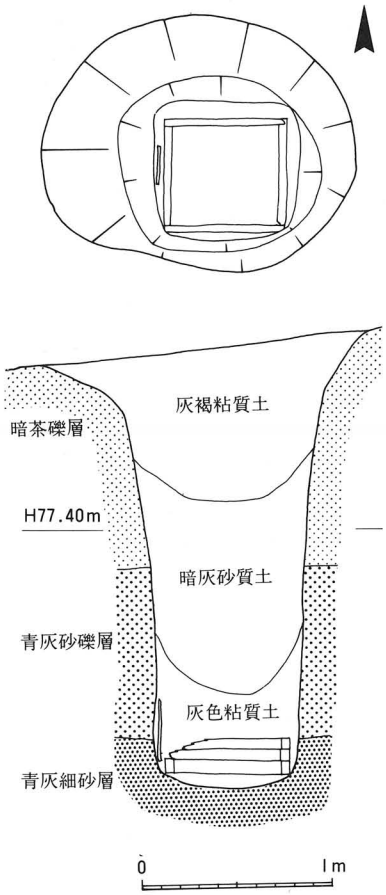


fig.12　SE2163

3．奈良時代の遺構

検出した主要遺構は、園池・井戸１基、建物１棟、暗渠１条、溝２条、土坑などである。

ＳＧ2162　市庭古墳の外濠ＳＧ2160は奈良時代に入ると園池として利用している。外堤の葺石ＳＸ2161を茶褐色粘質土で覆い、その上に小礫を敷き洲浜とする。洲浜は蛇行し、一部に出島の痕跡をとどめる。池底は茶褐色礫層や灰褐色砂層、褐色粘土が部分的に交替し、またところどころに凹凸があり、中島の名残りの高まりもある。池の深さは外堤部表面が後世の削平を受けていて明らかではないが、80cm程であろう。池の堆積土中には明確に腐蝕土といえるものはなく、常時水を湛える状態ではなかったのであろう。なお池底に密着するかたちで、藤原宮式や平城宮式の軒瓦が出土したが、埴輪片は少なく、園池を営む際、古墳の濠底を浚えているのであろう。

ＳＥ2163　ＳＧ2162の汀線に接して掘られた井戸。検出面から底まで深さ約2.5ｍを測る。掘形は上面では径約1.6ｍの円形を呈すが、底は一辺 0.8ｍの方形となる。底には板を井籠に組んだ井戸枠が３段分残っていた。枠板は長さ65cm、幅５～８cm、厚さ５cm、井戸枠の内法一辺長は56cmである。組手仕口は三枚組継ぎとし、東西面の枠木に出枘を、南北面の枠木に入枘を設ける。掘形と西面枠木の間には井戸枠据えつけ時の添え木である縦板が１枚残っていた。井戸枠は１段の成が低く、当初は40段程度あったのであろう。井戸の埋め土からは廃絶時に投棄した軒瓦6663型式や、奈良時代後半の須恵器、土師器が出土した。ＳＥ2163は位置からみて園池への給水用施設であろう。ただし、この井戸によってどの程度水を補い得たか疑問がある。丘陵上の井戸であるため湧水に乏しいと考えるのである。事実、調査中も不断は湧水はみられず、多量の降雨後にそれがみられた。従って、ＳＧ2162の水源を井戸に頼ったとすれば、こうした井戸が他にもあったと推測できよう。

ＳＤ2164　ＳＥ2163の西南に接する斜行溝。玉石を横にならべて側石とし、内法幅約25cmを測る浅い溝。長さ約２ｍ分を検出。おそらく園池に井戸の水を注ぐ施設であろう。

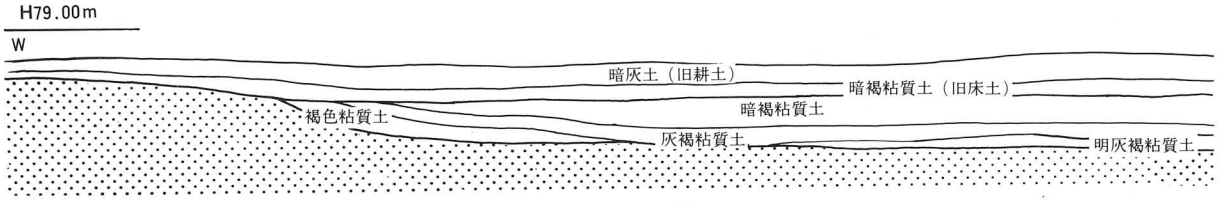


fig.13　SG2162土層図

ＳＢ2165　南北に並ぶ掘立柱掘形３個を検出。南北総長4.2ｍ（７尺等間）で、掘形は一辺60～80cmの方形を呈し、検出面からの深さ20cmである。柱痕跡は径30cmを測る。建物としての全容を知るに至らなかった。

ＳＤ2156　古墳内濠の整地面に掘られた素掘の斜行溝。西南から東北に向って流れる。西南端は近世の溜池によって破壊されている。この付近のみ小礫を詰め、盲暗渠風としている。溝幅は70cm、深さ20cmで20ｍ分検出。溝内から奈良時代の瓦、土器が出土。

ＳＤ2157　礫を詰めた東西盲暗渠で、西から東に向けて流れる。外堤部上面から内濠の整地面まで22ｍ余り検出。掘形は西から東へ向って拡っており、発掘区西端で 0.5ｍ、外堤部上面の最も広いところで 1.5ｍである。掘形の中央にのみ礫を上・下２層に詰める。礫の間から少量の埴輪片と藤原宮式の軒平瓦6647型式が出土した。

ＳＫ2158　墳丘裾の地山面を掘りこんだ土坑。重複がみられ、下層は長径80cmのやや不整形な土坑で、上層はこの一部を深さ60cm掘りこみ、底に土師器、高杯の杯部を敷く。この上には何らかの施設があったようであるが抜き取った後、川原石を落しこんでいる。石の間には土師器の杯や瓦片が混じっていた。出土土師器の年代は、平城宮編年のⅤ期（宝亀年間770～780年）に当たる。土坑内部の土はすべて水洗いしたが顕著な遺物は検出できなかった。

ＳＤ2167　園地ＳＧ2162の埋土を切りこんで掘られた東西溝。長さ34ｍ余り検出。埋土は３層から成り、最上層の部分には、完形品を含む多量の瓦が廃棄してあった。層位からみて、奈良時代以降の遺構である。

今回の調査によって市庭古墳は、奈良時代、宮内に含まれた前方部のみでなく後円部の大半を削平し、濠を埋めていることを確認し、さらに外濠を利用した園池とその関連施設を検出した意味は大きい。発掘区設定の制約から瓦葺建物そのものを検出することはできなかったが、園池ＳＧ2162の埋土や、内濠ＳＧ2160の整地面、特にＳＤ2167から出土した多量の瓦の出土によって、発掘区の近辺、おそらく北側にそうした施設があったのではあるまいか。

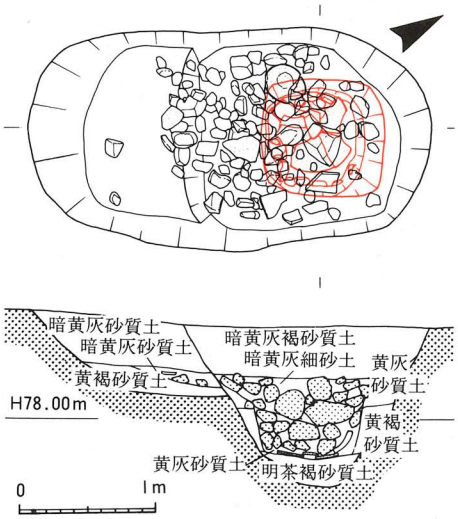


fig.14　SK2158

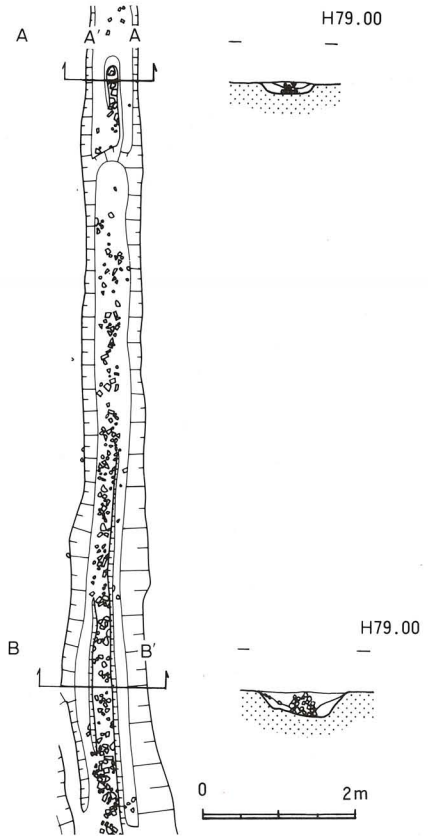
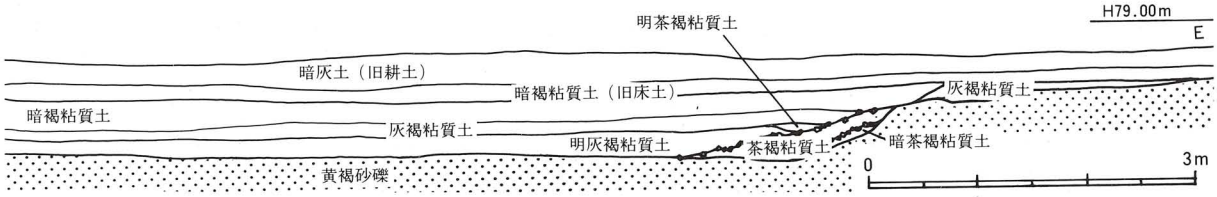


fig.15　SD2157



Ⅲ．遺　物

1．埴輪（PL.12、fig.16・17）

円筒埴輪　2～4は埴輪列、5・6は周濠内、7は整地土から出土。2～6は幅5～6cmの粘土板2～3枚で基部を作り、その上に粘土紐を逆時計まわりに巻上げ、各段を目処とする製作段階が認められるが、基底部の歪みの著しいものが多い。凸帯はりつけ前の第1次調整にタテハケ、凸帯はりつけ後の第2次調整にB種ヨコハケを使用。基底部の第2次調整を欠く例もある。内面はタテ・ナナメ方向のナデ調整である。透孔は円形だが、配置は不明(6・17)。口縁部は直口縁(18)と強い外反(16)の2種あり、量的比率は不明。外面に刻文をもつ例もある(PL.12－20)。基底部の極度に短かい19もある。外面にタテ方向の黒斑がつき、野焼焼成と考える。7は成形・調整は他と同じだが、無黒斑からみて窖窯焼成であり[註1]、市庭古墳に伴うとは考えられない。

朝顔形埴輪(1・13～15)　頸部(1)、口縁端部(14)、朝顔状に開く口縁の屈曲部(13)、頸部から半球状の胴部

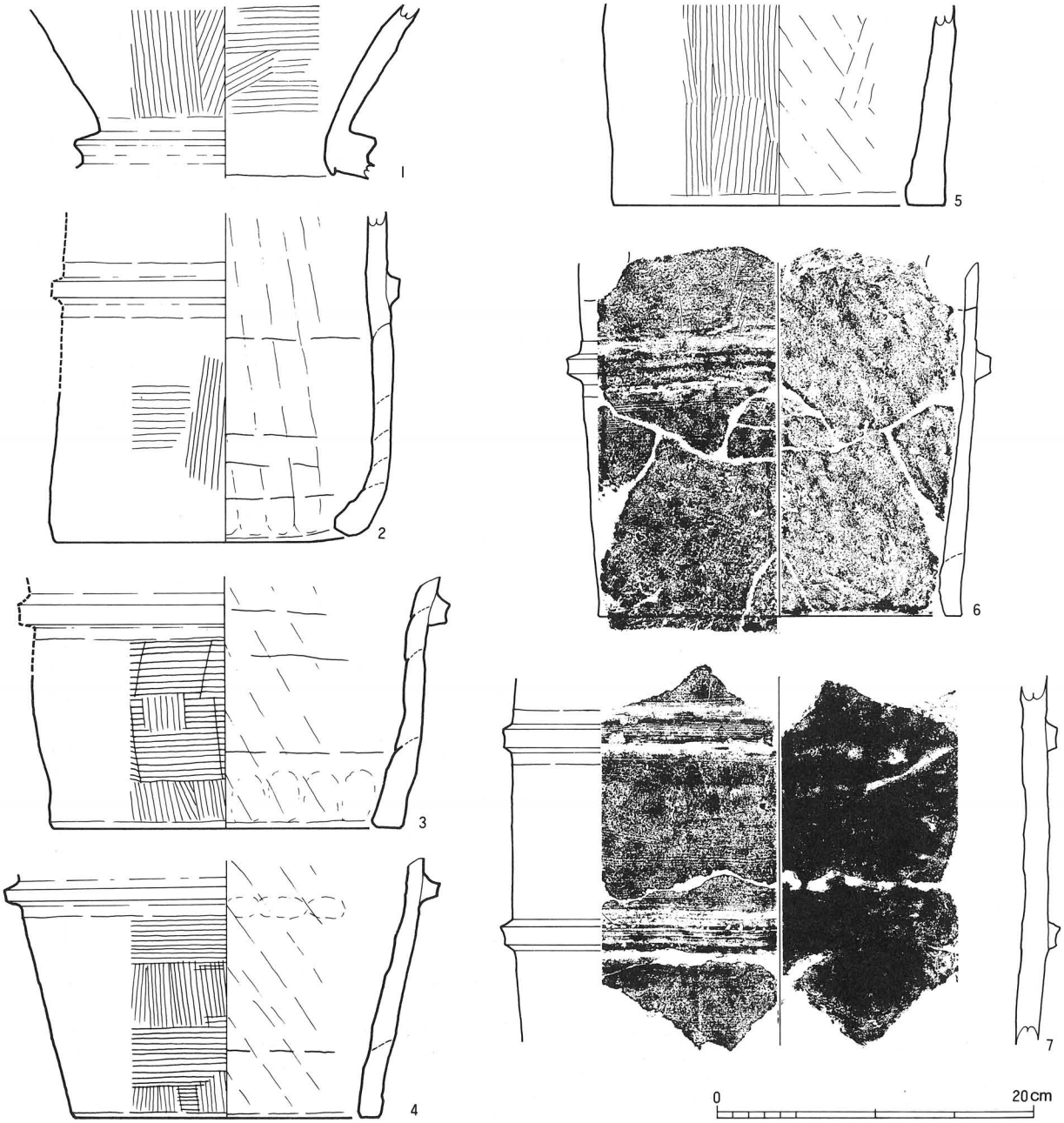


fig.16　埴輪実測図

にいたるもの(15)がある。外面には赤色塗彩がみられる。

形象埴輪　蓋形埴輪(８～10)。飾板の頂部(８)は片面にヘラ描きの直弧文がある。笠部と円筒部の接合部(９)と笠部の先端(10)の破片もある。10は傾斜がゆるく、別の形象埴輪か。囲形埴輪(11)[註2]。平面形態は長方形、上端部を連続して三角形に切りこみ、その下方に数本の凸帯をめぐらす埴輪の凸帯部分であろう。盾形埴輪(12)。盾のむかって左側外周の複合鋸歯文を表現する。裏面には円筒部へのとりつき部の剝離痕がある。

市庭古墳の円筒埴輪は今回の埴輪列、周濠内出土品と、以前の前方部出土品とは、それぞれ胎土・形態等がことなり、製作集団のちがいを示すものかもしれない。埴輪の年代は有黒斑・Ｂ種ヨコハケからみて５世紀前半と考える[註3]。周辺の古墳ではコナベ古墳・平塚１号墳の埴輪と近いものである[註4]。

註１　川西宏幸「埴輪研究の課題」『史林』56－４　1973

註２　北野耕平「稲城考」『日本史論集』1975

註３　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－２　1978　Ｂ種ヨコハケの評価いかんでは、
　　窖窯焼成の初現もＢ種ヨコハケの初現まであげうる可能性もある。

註４　奈文研『平城宮発掘調査報告』Ⅵ　1975 奈良市教委『奈良市埋蔵文化財調査報告』1980

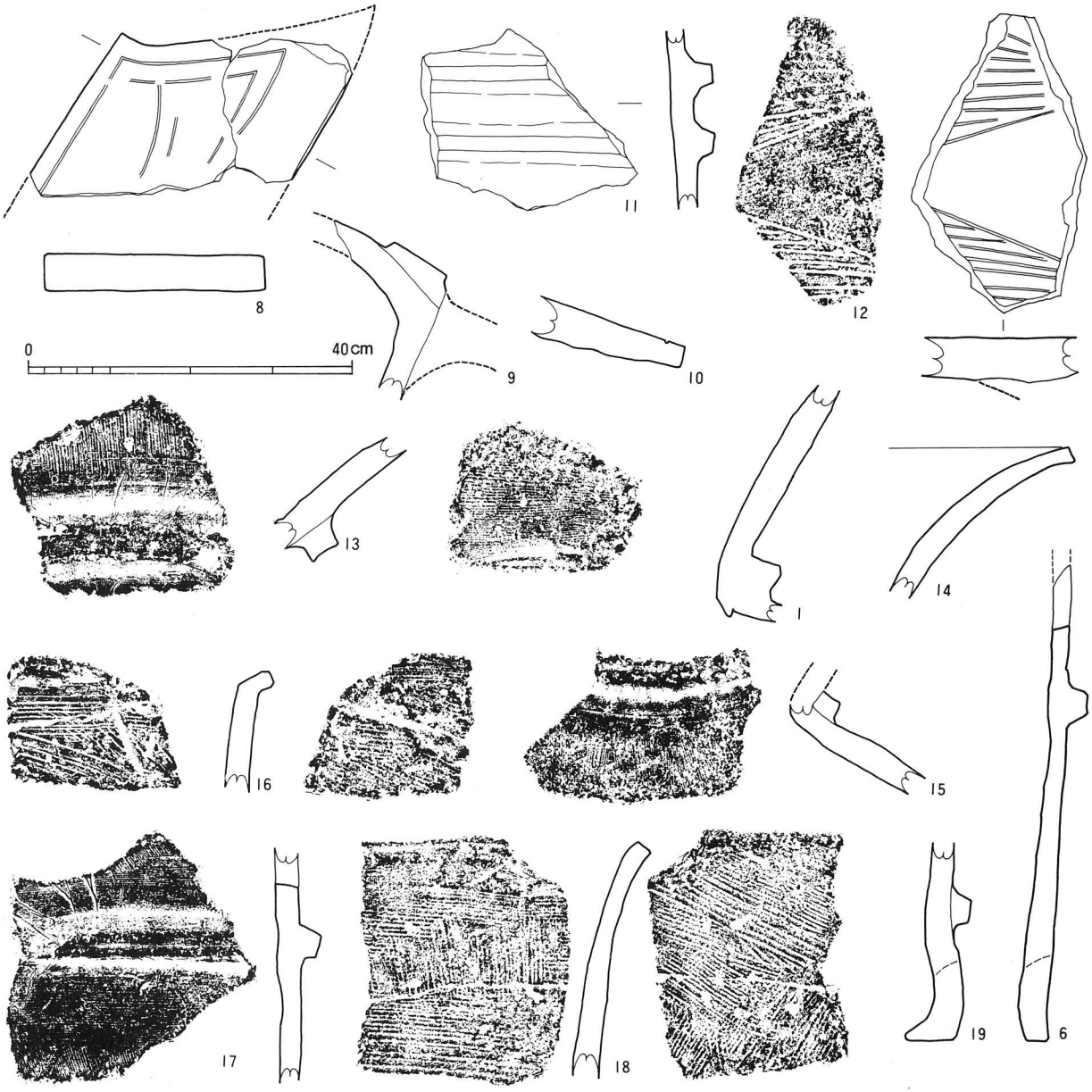
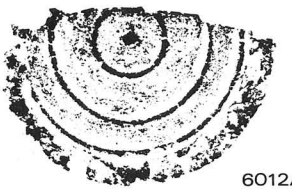
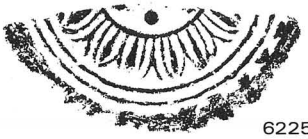
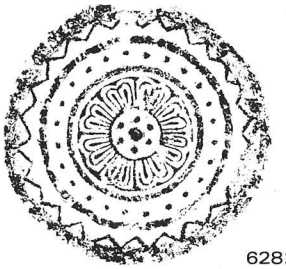


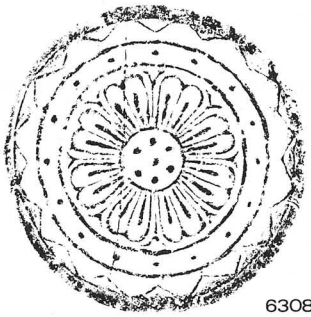
fig. 17　埴輪実測図

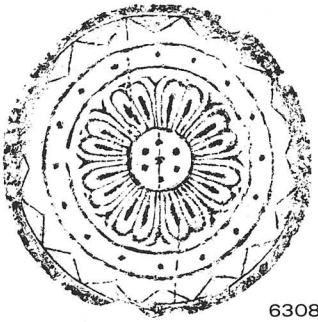

6012A

6135D


6225A


6282D


6308A


6308B

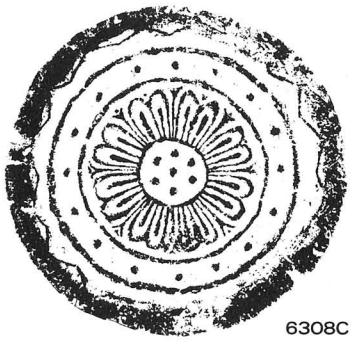

6308C

fig.18　軒丸瓦

2．瓦塼（PL.13～15、fig.18・19）

瓦塼類はＫ地区北辺を中心に発掘区のほぼ全域から出土したが、量は少ない。丸・平瓦が主体であるが、軒丸瓦が８型式31点、軒平瓦が８型式50点、塼が５点ある。なお、記述にあたっては奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を使用する。[註1]

軒丸瓦（PL.13・15、fig.18）

6012Ａ　三重圏文。中央に珠点１を置く。瓦当裏面は浅く凹む。１点。

6135Ｄ　単弁14弁蓮華文。外区に珠文と線鋸歯文をめぐらす。蓮子は１＋６。１点。

6225　複弁８弁蓮華文。外区に凸鋸歯文。外区と内区の境に二重圏線をめぐらす。中房は大きく、蓮子は１＋６。瓦当裏面は平坦である。３点。うち２点はＡ種である。

6282Ｄ　複弁８弁蓮華文。外区に珠文と線鋸歯文をめぐらす。蓮子は１＋６で、中央の蓮子が大きい。接合粘土は内外とも多量である。径13.2cm、全長36.3cm。２点。

6308　複弁８弁蓮華文。外区に珠文と線鋸歯文をめぐらす。蓮子は１＋６。20点。Ａ・Ｂ・Ｃ種がある。Ａは中房がやや突出。笵傷を示すものがある。径16.2cm。３点。Ｂは中房が突出するがＡより低い。笵傷を示すもの、顎部に刻印を施すものがある。刻印は「北」１種，「井」２種(PL.15－１～３)がある。径16.2cm、全長37.7cm。８点。Ｃは中房が凹む。焼成後丸瓦部に釘孔を穿つものがある。径17.4cm、全長36.4cm。４点。

このほか6284型式が３点、小型の6313型式と藤原宮式が各１点出土。

軒平瓦（PL.13・14、fig.19）

6641　右偏行唐草文。上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文を配す。段顎。Ｃ・Ｆ各１点、Ｅ２点出土。

6663　３回反転均正唐草文。中心飾りは花頭形、内外区を二重界線で画す。曲線顎。21点。Ａ・Ｂ・Ｆ種がある。Ａは唐草文第３単位の主葉と第１支葉が脇区界線に接す。両端部に范割れ痕のあるもの、平瓦部側面に刻印を施すものがある。刻印は「井」２種（PL.15－４・５）があり、うち１種が6308Ｂの刻印と同一である。上弦幅28.5cm、全長30.2cm。17点。ＢはＡに似るが、唐草文第２単位と第３単位の間に珠文をおく。上弦幅29.1cm、全長37.9cm。２点。Ａ・Ｂとも平瓦部凸面には縦位の縄叩き目が残る。Ｆは唐草文第３単位の主葉と第１支葉が脇区界線に接しない。１点。

6664　３回反転均正唐草文。中心飾りは花頭形、外区と脇区に珠文を配す。段顎。13点。Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｉ・Ｋ種がある。Ｃ・Ｉ・Ｋは花頭基部が界線に接しないが、Ｄ・Ｆは界線に接す。Ｃが５点、Ｉ・Ｋが各１点、Ｄ・Ｆが各３点出土。

6685　３回反転均正唐草文。中心飾りは十字形、外区と脇区に珠文を配す。段顎。Ａが３点、Ｂが１点出土。Ａは平瓦部凸面に縦位の縄叩き目を残す。

6721　５回反転均正唐草文。中心飾りは小字形、外区に珠文を配す。曲線顎。Ｃが１点、Ｅが４点出土。Ｅは平瓦部凸面に斜位の縄叩き目、凹面に布端痕が残る。１枚づくりである。上弦幅25.9cm、全長35.9cm。

6726Ｅ　３回反転均正唐草文。中心飾りは小字形。外・脇区は珠文。曲線顎。1点。

6732Ｐ　いわゆる東大寺式に属す。新種。他種に較べて支葉の巻きが強い。直線顎に近い曲線顎。１点。以上のほか藤原宮式6647型式が２点出土している。

丸・平瓦

丸瓦はすべて玉縁式である。完形品でみると全長は約37cmであるが、径は14.5cm、16cm、18cm前後の３種がある。最大径の丸瓦は藤原宮からの転用瓦で、凸面にカキ目を施す。量は少ない。他は凸面をナデるが、一部に縦位の縄叩き目が残る。

平瓦は凸面に平行叩き目を施す藤原宮からの転用瓦と格子目叩きのものが少量あるが、大部分が凸面に荒い縦位の縄叩き目を施した軟質のものである。これには全長32～34cm、厚さ 1.7cm前後のものと、全長約36cm、厚さ２cm前後のものとがある。ともに１枚づくりの痕跡を残すものがある。

小結

今回出土した軒瓦は、総数81点と少ないが、6012Ａと6732Ｐの２点をのぞけば平城宮と同笵であり、各時期にわたり組み合せをもって出土する傾向が認められる。平城宮出土軒瓦編年第Ｉ期（和銅元年～養老５年）には、6641・6647など藤原宮式軒瓦のほか6284－6664Ｃ・Ｉ・Ｋの組み合せ、等II期（養老５年～天平17年）には6225・6308－6663と小型軒瓦6313－6685の組み合せ、第III期（天平17年～天平勝宝年間）には6282－6721の組み合せがある。第II期の6663は、平城宮において6225と組み合い朝堂院式と呼ぶが、本調査区では出土比率から6308と組み合う。とくに、6308Ｂと6663Ａは同一の刻印「井」が押捺されており、一組として生産、使用されたことがわかる。

近年、平城京内においてもまとまった量の瓦を出土する遺跡が増加し、その中には宮と異なる瓦を別個に生産・使用した場合があったこと、これらは神亀元年(724) の邸宅への瓦葺き奨励を反映したものであろうと指摘されている。[註4] 本調査区の瓦の様相は、既述のようにこれと異なり、各時期にわたって宮と同笵のものが使用され、その中に平城遷都に伴なって再利用されたと考えられる藤原宮式を含む点に特徴がある。本調査区は平城宮北辺に位置し、平城宮造営当初から宮と密接な関連を有した公的性格の強い地域であったと考えられる。

註１　『平城宮出土軒瓦型式一覧』(奈文研1978)

註２　『奈良国立文化財研究所基準資料II　瓦編２解説』(奈文研1975)

註３　「北」の刻印も両者にある。『同上　瓦編５』(1977)

註４　『平城京朱雀大路発掘調査報告』(奈良市1974)。『平城京左京三条二坊』(奈文研1975)。

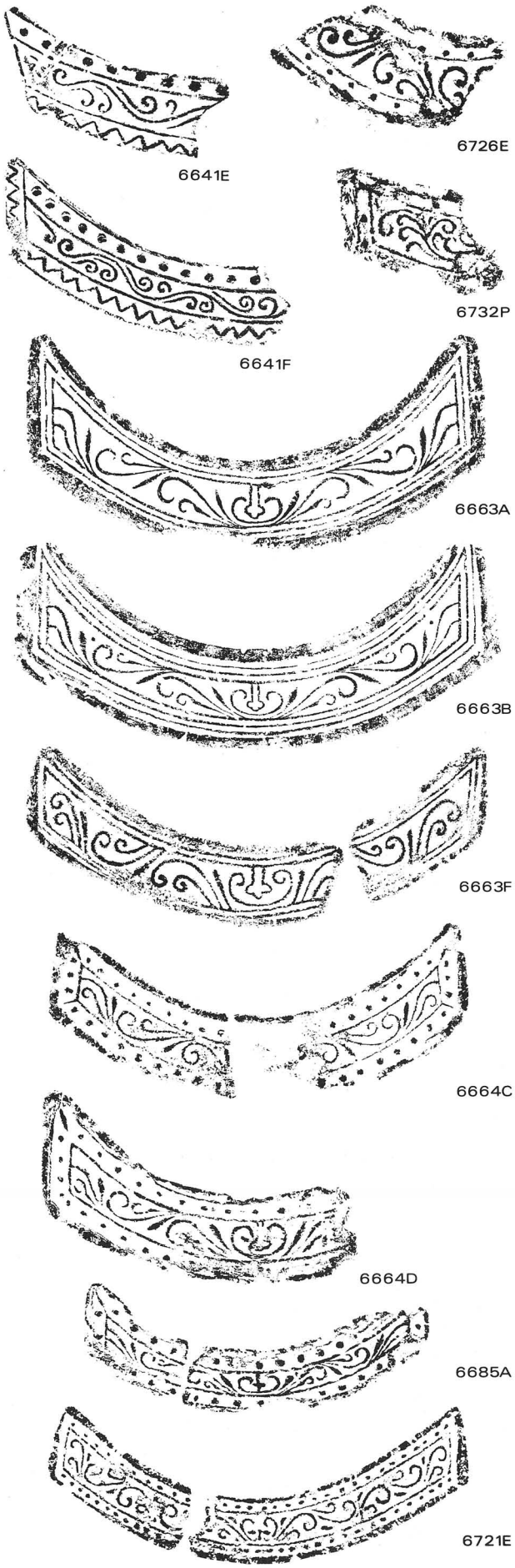


fig.19　軒平瓦

3．土器（PL.15、fig.20）

土器類は、調査区全域から土師器・須恵器が出土したが、概して少量である。

ＳＫ2158出土土器　土師器皿Ａ（７）・椀Ａ（６）・高杯（８）・カマド、須恵器甕がある。平城宮Ⅴに属する。土師器皿Ａは底部外面ヘラ削りである。椀Ａは口縁部外面にヘラ磨きを施す。高杯は脚部を欠失する。杯部外面はヘラ削りの後４回にわけてヘラ磨きする。

ＳＥ2163出土土器　土師器杯Ｃ(11)・高杯・甕Ａ（９）、須恵器杯Ｂ蓋(10)・壺Ａ(12)がある。平城宮Ⅲに属する。土師器杯Ｃは底部外面ヘラ削りである。甕Ａは口縁部外面は横なでし、内面は横方向のハケメを施す。体部外面は斜方向のハケメで調整する。須恵器杯Ｂ蓋は頂部外面をロクロヘラ削りする。内面を硯に転用している。壺Ａは口縁部は短く立ちあがり、肩部はなだらかである。体部外面はロクロヘラ削りするが、上半は削りの後なでを加える。肩部は灰をかぶり、蓋とともに焼成された痕跡を残す。

その他の土器　土師器椀Ａ（５）は口縁部上半を横なでし、以下は不調整である。土師器蓋（２）は頂部外面から縁部にかけてヘラ削りし、その後、つまみを狭んで４回わけのヘラ磨きを施す。須恵器壺Ｅ（４）は広口短頸の小型壺で、口縁部はするどく屈曲する。体部下半はロクロヘラ削りし、なでを加える。広口壺蓋（１）は頂部外面をロクロヘラ削りする。須恵器甕（３）は平底の底部外面に木葉痕がある。体部外面は平行線叩き目、内面には細かい当板同心円文をとどめている。１・２は性格不明土坑、３～５は遺物包含層から出土した。

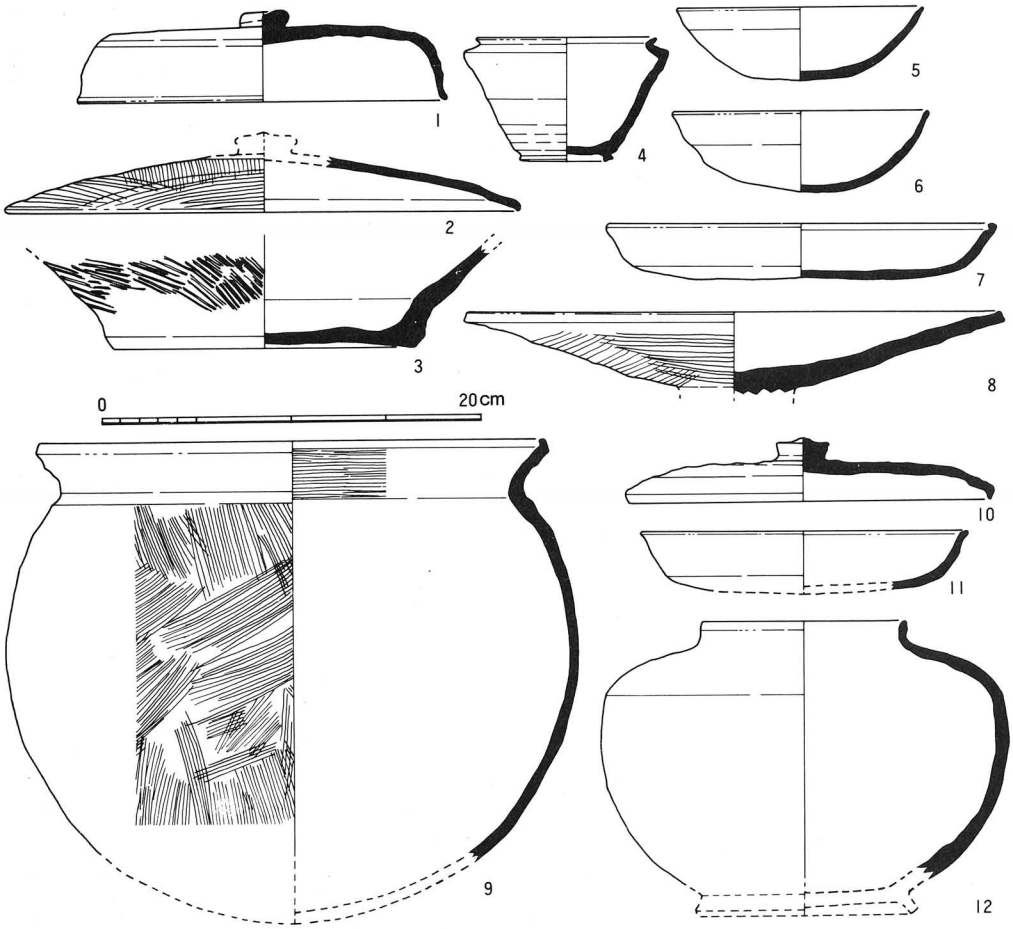


fig.20　土器実測図

Ⅳ．まとめ

1．平城京と宮の庭園遺跡

第126次庭園遺構

今回園池を検出した地域は、平城宮北方・大蔵省推定地で『続日本紀』に天皇が大蔵省で相撲を御覧になる記事や、この北に接する松林宮に曲水宴を行なう記事がみられることにより儀式・宴遊の施設が存在したことが推測される。園池の遺跡はその一部を検出したに過ぎないが、園池の規模は、市庭古墳外堤部を利用し、外堤の幅18mで蛇行して西南へ伸びる。外堤部の葺石は内側（墳丘側）だけ、径7.8cmの礫で30°の勾配で葺かれているが、この葺石を利用して5°の緩勾配に敷き並べて蛇行した洲浜を形成している。池底は粘土質の地山で、所々に上部は削平されているが高まりがみられ、中島・出島を形成していたものと思われる。今回の検出範囲では景石はみられなかったが、洲浜石敷が外堤の内側にのみ存在することより、外側に建物が建ち、外から墳丘部を背景にした庭園の鑑賞を行なう構想が計られたものかと思われる。園池は丘陵部に位置するため、自然の水系による給水は困難で、園池への給水のため井戸ＳＥ2163が掘削されている。水深は井戸・池底・洲浜石敷から判断して、60cm位の浅い池で、池底の水勾配から水は東北から南西へ流れている。池内の堆積は赤色粘土が30cm堆積しているに過ぎず、池底に水を使用したと考えられる有機質・腐植土層の堆積はみられず、常時は滞水していなかったものと思われる。

園池ＳＧ2162は、1969年度に24号線バイパス路線の事前調査で行なった第56次調査（平城京左京一条三坊十五・十六坪）で検出した園池ＳＧ520と立地意匠の上で共通点を持つ。即ち平城京造営に際し、前代の古墳の墳丘の削平、濠の埋め立てだけでなく、56次では前方部の濠の一部を、126次では後円部の外堤の一部をそれぞれ利用して園池を造成している(fig.21・22)。また古墳の葺石の28°の勾配を３°の緩勾配に並べかえて園池の洲浜石敷を形成している。

園池の岸辺に礫を並べて蛇行した緩勾配の洲浜を形成する手法は藤原宮で発掘された園池（第２次・４次調査）にその意匠がみえる。[註]

古墳葺石を園池の洲浜に利用する形が２例検出され、かなり古くから園池に洲浜を形成する意匠が存在したことと、石積等土木造園技術に於て、前代との共通性の存在が予想される。

註『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』(奈良国立文化財研究所学報27冊）1976
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報２』1972

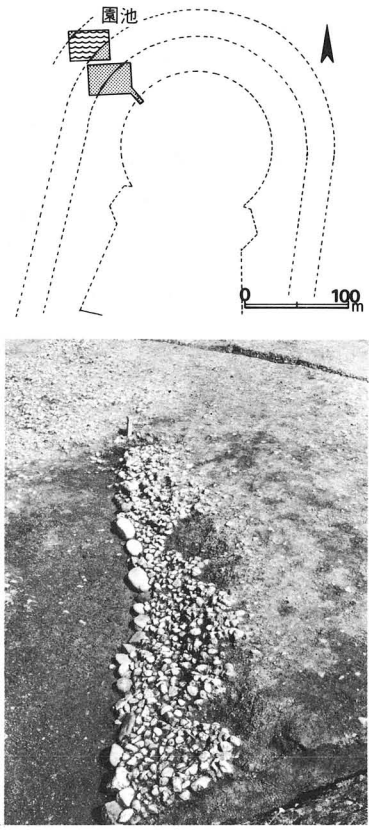


fig.21　第126次調査ＳＧ2162

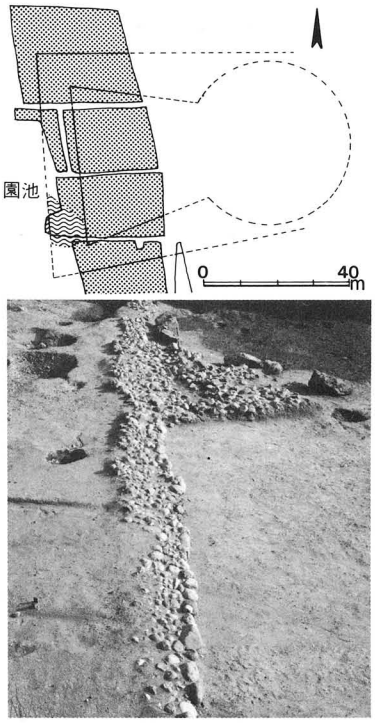


fig.22　第56次調査ＳＧ520

平城京と宮の園池

従来、平城京の園池は『万葉集』『懐風藻』にみられる藤原不比等・宇合・麻呂、長尾王などの邸宅の園池の描写より、また宮内の園池は『続日本紀』にみられる松林苑・西池宮・南苑などの記事より往時の姿を推測していたにすぎない。近年の発掘調査の成果により平城京・宮の園池の全容もしくは一部が、今回の調査を含んで９ケ所検出され、日本庭園史解明の上で貴重な資料を提供している。検出された９ケ所の園池を検討してみると立地・意匠の上でいくつかの共通点がみられる。立地の問題では、地形的に山麓部に位置するものは水源として湧泉を利用する形（表２右図Ａ）や、谷筋に位置し堤を造成して溜池にする形態（Ｂ）をとる。平地部に於ては湿地・旧河床（Ｇ・Ｈ）や前代の古墳の周濠を利用する形（Ｄ・Ｅ）と新たに池を穿つ（Ｃ・Ｆ・Ｉ）の２つに分類できる。また庭園意匠の上で、水源が主に浅い谷筋の河川に由来するため、いずれも50cm未満の浅い池であること、また緩やかな3～10°の勾配を持つ蛇行した汀線・洲浜石敷を持つことが共通の意匠としてみられる。園池と建物の関係では、近接した位置にも建てられ鑑賞だけでなく、機能的な空間としても存在していたことなど一部ではあるが、従来未解決部分が多かった奈良時代庭園史を解明する手掛りを得た。

表２　平城京と宮の園池

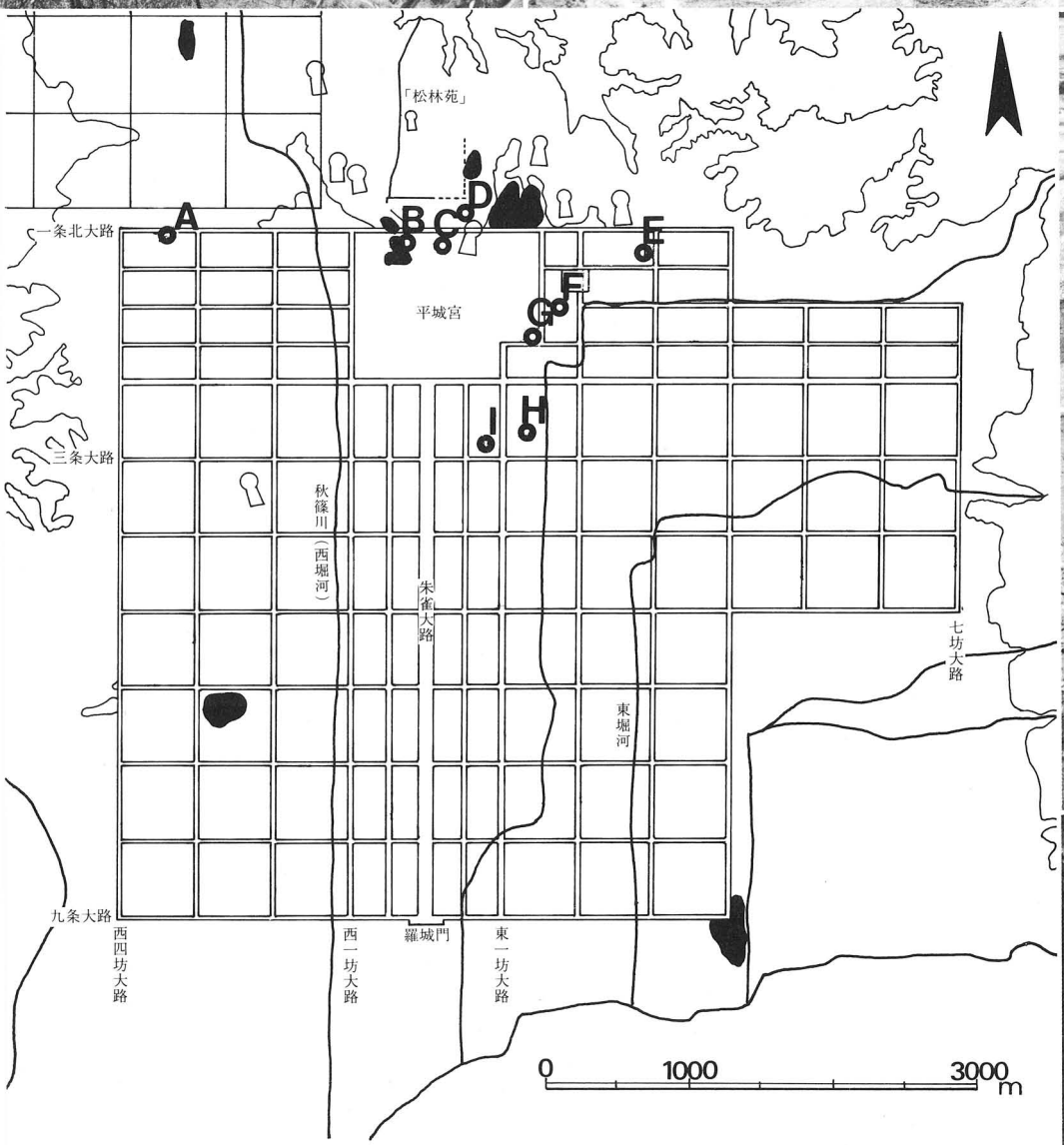
名　　称	位　　置	発　掘　調　査	規　模　形　状	意　　匠	現　況	報　告　書　等
Ａ．伝称徳天皇御山荘跡（平城京西四坊北辺）	西大寺奥院北西 200ｍ西の京丘陵の北端溪流状の地形	1979年　第118－2･20次調査 東岸・南岸の一部を検出	南北18ｍ、東西55ｍ 水深約20cm ヒョウタン形 1,160㎡	中島、北西隅に湧泉護岸は地山の掘り込み。	溜池	『昭和54年度平城宮跡発掘調査概報』
Ｂ．佐紀池	平城宮内・奈良山丘陵の谷筋	1975年　第92次調査－西南池尻 1976年－第101次調査、北側東西岸一部検出	南北150ｍ、東西160ｍ、形状は現況に類似、水深50cm。 16,500㎡	岸辺10°の緩勾配で挙大石敷の巾２ｍの洲浜	用水池 特別史跡	『奈良国立文化財研究所年報』1976、1977
Ｃ．平城宮	平城宮内大膳職地区	1960年　第４次調査－池全容を検出	南北17ｍ、東西18ｍの不規則形。最深部の深さ80cm。 150㎡	護岸は整地土の掘り込み。東に隣接して南北棟が建つ。	特別史跡整備済（池平面表示）	『平城宮発掘調査報告Ⅱ』　1962
Ｄ．平城宮北辺地域（大蔵省推定地）	平城宮北辺大垣と松林苑の間、市庭古墳後円部北西	1980年　第126次調査－市庭古墳の外堤の一部を利用した園池を一部検出	南北巾16ｍ 水深60cm	外堤の葺石を利用して５°の勾配の巾３ｍの洲浜。	分譲住宅建設地	『本報告書』　1981
Ｅ．平城京左京一条三坊十五坪	不退寺（業平別邸）の真西	1969年　第56次調査－平塚２号墳前方部の一部を利用した園池の東半検出	南北10ｍ、東西20ｍの曲池、水深20～30cm。 150㎡	前方部の葺石利用して3°の勾配の洲浜、庭石６ケ	24号バイパス　平城資料館中庭に移転展示	『平城宮発掘調査報告Ⅳ』　1974
Ｆ．法華寺	平城宮東辺	1980年　第123－4次調査－池の一部を検出	一部（南北10ｍ、東西７ｍ）	礫敷の護岸・洲浜	宅地	
Ｇ．平城宮東院	東院東南隅、宇奈多里神社林丘東	1967年　第44次　1976年第99次　1978年 第110次 1979年 第120次各調査で池の全容、付属建物検出	南北60ｍ、東西60ｍ鍵の手状に複雑に屈曲した汀線、水深40cm。 1,970㎡	初期の庭は汀線に安山岩を敷きつめ、後期の庭は全面玉石敷景石・中島・橋を設ける。	特別史跡整備予定	『奈良国立文化財研究所年報』　1968、1977、1979、1980
Ｈ．平城京左京三条二坊六坪	東に隣接して菰川が流れ、池は六坪の中心に位置する。	1975年　第96次、1978年第109次、1980年　第121次、各調査で池の全容、付属建物検出	南北延長55ｍ、東西巾15ｍの曲池、水深25ｍ。 220㎡	全面石敷の池で、洲浜、庭石を持つ。	特別史跡整備中	『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976、1980
Ｉ．平城京左京三条一坊十四坪	十四坪の南西端	1968年、第46次調査で西側小路に沿った築地、門その内側に建物、園池の一部検出	一部（南北５ｍ、東西10ｍの円形の池、水深25cm。	中島と径20cmの玉石が裾部に一部残存、庭石１ケ。	電々公社敷地	『奈良国立文化財研究所年報』　1968

平城京と宮の園池

従来、平城京の園池は『万葉集』『懐風藻』にみられる藤原不比等・宇合・麻呂、長尾王などの邸宅の園池の描写より、また宮内の園池は『続日本紀』にみられる松林苑・西池宮・南苑などの記事より往時の姿を推測していたにすぎない。近年の発掘調査の成果により平城京・宮の園池の全容もしくは一部が、今回の調査を含んで９ケ所検出され、日本庭園史解明の上で貴重な資料を提供している。検出された９ケ所の園池を検討してみると立地・意匠の上でいくつかの共通点がみられる。立地の問題では、地形的に山麓部に位置するものは水源として湧泉を利用する形（表２右図Ａ）や、谷筋に位置し堤を造成して溜池にする形態（Ｂ）をとる。平地部に於ては湿地・旧河床（Ｇ・Ｈ）や前代の古墳の周濠を利用する形（Ｄ・Ｅ）と新たに池を穿つ（Ｃ・Ｆ・Ｉ）の２つに分類できる。また庭園意匠の上で、水源が主に浅い谷筋の河川に由来するため、いずれも50cm未満の浅い池であること、また緩やかな3～10°の勾配を持つ蛇行した汀線・洲浜石敷を持つことが共通の意匠としてみられる。園池と建物の関係では、近接した位置にも建てられ鑑賞だけでなく、機能的な空間としても存在していたことなど一部ではあるが、従来未解決部分が多かった奈良時代庭園史を解明する手掛りを得た。

表２　平城京と宮の園池

名　　称	位　　置	発　掘　調　査	規　模　形　状	意　　匠	現　況	報　告　書　等
Ａ．伝称徳天皇御山荘跡（平城京西四坊北辺）	西大寺奥院北西 200ｍ西の京丘陵の北端溪流状の地形	1979年　第118－2･20次調査 東岸・南岸の一部を検出	南北18ｍ、東西55ｍ水深約20cm ヒョウタン形 1,160㎡	中島、北西隅に湧泉護岸は地山の掘り込み。	溜池	『昭和54年度平城宮跡発掘調査概報』
Ｂ．佐紀池	平城宮内・奈良山丘陵の谷筋	1975年　第92次調査－西南池尻 1976年－第101次調査、北側東西岸一部検出	南北150ｍ、東西160ｍ、形状は現況に類似、水深50cm。 16,500㎡	岸辺10°の緩勾配で挙大石敷の巾２ｍの洲浜	用水池 特別史跡	『奈良国立文化財研究所年報』1976、1977
Ｃ．平城宮	平城宮内大膳職地区	1960年　第４次調査－池全容を検出	南北17ｍ、東西18ｍの不規則形。最深部の深さ80cm。 150㎡	護岸は整地土の掘り込み。東に隣接して南北棟が建つ。	特別史跡整備済（池平面表示）	『平城宮発掘調査報告Ⅱ』　1962
Ｄ．平城宮北辺地域（大蔵省推定地）	平城宮北辺大垣と松林苑の間、市庭古墳後円部北西	1980年　第126次調査－市庭古墳の外堤の一部を利用した園池を一部検出	南北巾16ｍ 水深60cm	外堤の葺石を利用して５°の勾配の巾３ｍの洲浜。	分譲住宅建設地	『本報告書』　1981
Ｅ．平城京左京一条三坊十五坪	不退寺（業平別邸）の真西	1969年　第56次調査－平塚２号墳前方部の一部を利用した園池の東半検出	南北10ｍ、東西20ｍの曲池、水深20～30cm。 150㎡	前方部の葺石利用して3°の勾配の洲浜、庭石６ケ	24号バイパス　平城資料館中庭に移転展示	『平城宮発掘調査報告Ⅳ』　1974
Ｆ．法華寺	平城宮東辺	1980年　第123－4次調査－池の一部を検出	一部（南北10ｍ、東西７ｍ）	礫敷の護岸・洲浜	宅地	
Ｇ．平城宮東院	東院東南隅、宇奈多里神社林丘東	1967年　第44次　1976年第99次　1978年 第110次 1979年 第120次各調査で池の全容、付属建物検出	南北60ｍ、東西60ｍ鍵の手状に複雑に屈曲した汀線、水深40cm。 1,970㎡	初期の庭は汀線に安山岩を敷きつめ、後期の庭は全面玉石敷景石・中島・橋を設ける。	特別史跡整備予定	『奈良国立文化財研究所年報』　1968、1977、1979、1980
Ｈ．平城京左京三条二坊六坪	東に隣接して菰川が流れ、池は六坪の中心に位置する。	1975年　第96次、1978年第109次、1980年　第121次、各調査で池の全容、付属建物検出	南北延長55ｍ、東西巾15ｍの曲池、水深25ｍ。 220㎡	全面石敷の池で、洲浜、庭石を持つ。	特別史跡整備中	『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976、1980
Ｉ．平城京左京三条一坊十四坪	十四坪の南西端	1968年、第46次調査で西側小路に沿った築地、門その内側に建物、園池の一部検出	一部（南北５ｍ、東西10ｍの円形の池、水深25cm。	中島と径20cmの玉石が裾部に一部残存、庭石１ケ。	電々公社敷地	『奈良国立文化財研究所年報』　1968



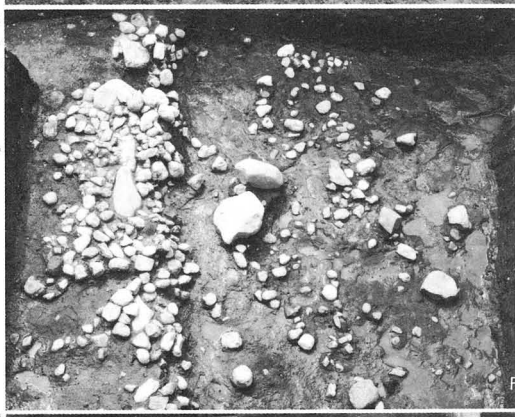
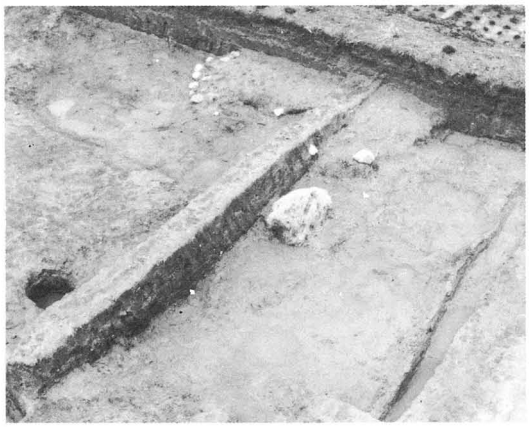
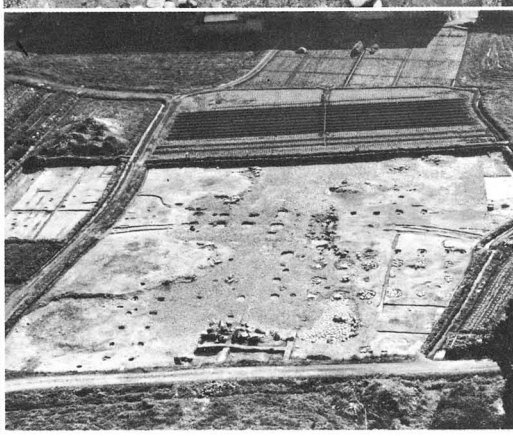


fig.23　平城京と宮の園池遺跡（A～Iのアルファベットが検出地点）





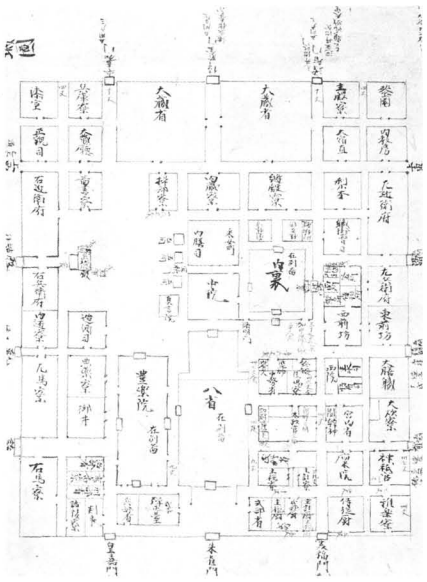


fig.24　平安京宮城図　（九条家本）

大蔵省関係年表（『続日本紀』による）

大宝1(701)．8．7
　撰令所処分。職事官人賜レ禄之日、五位巳下皆参二大蔵一受二其禄一。若不レ然者、弾正糺察焉。
慶雲3(706)．閏1．13.
　勅。収二貯大蔵一諸国調者、令下二諸司一毎レ色検校相知上。又収二貯民部一諸国庸中軽物絁絲綿等類、自レ今以後、収二於大蔵一、而支二度年料一分二充民部一也。
和銅6(713)．9．21.
　加二大蔵省史生六員一。
養老3(719)．12．2．
　充二式部・治部・民部・兵部・刑部・大蔵・宮内・春宮印各一面一。
養老5(721)．2．15.
　大蔵省倉自鳴有レ声。
天平10(738)．7．7．
　天皇御二大蔵省一覧二相撲一。晩頭転御二西池宮一。
天平13(741)．11．23.
　始以二赤幡一班二給大蔵・内蔵・大膳・大炊・造酒・主醤等司一。供御物前建以為レ標。
天平宝字2(758)．8．25.
　大蔵省、出二納財物一応レ有二節制一。故改為二節部省一。
天平宝字4(760)．1．2．
　幸二大保第一。以二節部省絁・綿一、賜二五位巳上及従官主典巳上一各有レ差。
天平宝字8(764)．8．3．
　節部省北行東第二雙倉災。
天平宝字8(764)．8．9．
　賜下救二節部省火一雑色巳上絲・綿上有レ差。
宝亀3(772)．6．30.
　幸二大蔵省一。賜レ物有レ差。
宝亀6(775)．10．2．
　又大蔵省雙倉被レ焼、大臣私更営構、于レ今存焉。
宝亀7(776)．9．20.
　幸二大蔵省一。賜二陪従五位巳上禄一。
延暦1(782)．7．3．
　雷雨。大蔵東長蔵災。

2．史料からみた平城宮大蔵省

平城宮の北辺には、近年「松林苑」と推定される築地区画が発見され、新たに宮との中間地帯の性格をいかに考えるかが問題となってきた。II章ではこの中間地帯が大蔵省倉庫群の占地であるとの説を紹介した。ここではこの説を有力な仮説と考え、平城宮大蔵省について史料上から検討を加えておこうと思う。ただ、江戸時代に北浦定政は宮の背後にも市街区となる平城京の北辺坊を考えている。これに従うと大蔵省の占地はなりたたなくなるので、まずこの説の可否をみておこう。北浦が北辺坊を推定した根拠は、鎌倉時代中期の西大寺敷地図に平城京右京の二坊から四坊にかけて北一条大路の北に北辺二坊～四坊として、条坊の半条分（２坪分）の区画を描いていること、同時期の西大寺三宝料田畠目録に「添下郡右京一条北辺三坊二坪内一反字西大寺北大垣内南畔本」などとあり、また西大寺々本検注并目録取帳（建長三・1251年）にも「北辺二坊三坪」などとみえるように、右京北辺の二坊から四坊にかけて一～八坪の記載が残っていることによる。[註1] 北浦定政はこれらの史料と実地踏査の所見をあわせて平城京を復原しており、その平城宮大内裏跡坪割之図（嘉永五・1852年）・平城大内敷地図（文久元・1861年）では、左・右京を通じて北一条大路の北に条坊の半条分の北辺を描いているのである（PL.17）。明治に入り平城宮の復原研究に大きな成果をあげた関野貞氏は、はじめ北浦の図に従って北辺坊を東京極から西京極まで一貫したものと考えた。[註2] しかし、『平城京及大内裏考』では説を改め、宮城の北には条坊痕跡が認められないこと、左京二坊～四坊の北には古墳があり東西の大路を考え難いことなどから、平城京の北京極は北一条大路であったが、のちに西大寺が寺領寺域を北に拡張した際に右京二坊～四坊にのみ北辺の条坊を設けたとした。これには喜田貞吉氏の批判、西大寺関係史料は秋篠寺との寺領争論にかかわるもので誇張があって信用できず、従って北辺坊はなかったとの主張が影響しているのであろう。[註3] 以後北辺坊存否の問題は右京二坊～四坊の北側に限定されている。当調査部ではこのうち右京二坊の北側で数次の発掘調査を実施し、掘立柱建物・井籠組の大規模な井戸などを検出しているが、条坊痕跡は検討の余地があり、[註4] 右京の北側においてもこの問題は未解決である。仮に、平城京の条坊と同一計画の北辺坊が存在したとしても、それは「松林苑」の位置からみて宮の背後には及ばない。すなわち、前章で述べたように「松林苑」南辺築地と宮北面大垣の心々距離は240、12mを測る。一方平城京の計画寸法の1800尺方眼（尺＝0.295m）からすると北辺坊の半条分は900尺（265.5m）となる。宮北辺の計画線は北大垣心の北80尺（23.6m）と推定しており、従って北辺坊の北限線は北大垣から北980尺（289.1m）の位置にくるが、これは「松林苑」南辺築地より北に166尺（48.9m）入ってしまう。既述

の如くこの築地は宮の造営当初に遡る可能性があり、従って宮の北側部分には北辺坊の設定は考え難いのである。

次に平城宮大蔵省についてどのような具体像が考えられるであろうか。平安京の宮城図古図(fig.24) では宮域が平城宮に比べて北に半条分拡大し、その中央部を大蔵省が占め、省の西南辺に大蔵庁がある。大蔵省の区画の大部分は大蔵省正倉（蔵）院――倉庫群が位置する場所であった。大規模な倉庫群は、大蔵省が出納管理する諸国からの調物や庸物などを保管する施設であった。宮衛令兵庫大蔵条には「凡そ兵庫大蔵の院の内には、皆火を将(も)て入ること得じ。」とあって一院をなしたことが知られ、『続日本紀』に「大蔵省倉」「北行東第二雙倉(ならびぐら)」「大蔵省雙倉」「大蔵東長蔵」とみえるように各種の倉庫が整然と配列されていたのである。「北行東第二雙倉」とは北の列の東から２番目の雙倉の意で、こうした倉庫の間には火災に備えて池や渠(みぞ)を配していた（倉庫令倉於高燥処置条）であろう。大蔵省正倉院の機能をみてみると、まず、調庸物を中央において勘納する際に、民部省の官人が輸貢してきた郡司と共に大蔵省の正倉院において現物を勘会することになっていた（延喜民部式勘納調庸物条）。また支給については、『続日本紀』大宝元年(701) ８月丁未条に「撰令所処分すらく、職事の官人に禄を賜うの日、五位已下は皆大蔵に参じて其の禄を受けしむ」とあって、五位以下の官人達は皆大蔵に参集して季禄の禄物（絁・綿・布・鍬・絲・鉄など）を受けとることが定められている。これは平安時代においても、季禄を五位以下の官人に分配する時は大蔵省正倉院に「禄物を運積」して、参集した官人らに賜わることになっている(『儀式』二月廿二日賜春夏季禄儀条)。山陵使（荷前使(のさきのつかい)）が諸山陵に奉ずる幣物は、大蔵省正倉院の「中区」・「大庭」と呼ぶ場所に積み上げ分配されており[註5]、季禄の場合もそうした正倉院中の空間において禄物の運積・分配がなされたのであろう。こうした支給のあり方は、古く朝庭に貢進物を積み上げて誇示したという伝承[註6]と関連するのかもしれない。この正倉院は御倉守（宮衛令にいう守当人）によって守られ、毎日衛府等が巡検する決まりであった(延喜大蔵式巡検正倉院条)。以上のように大蔵省正倉院は単に貢進された調庸物を保管する機能のみでなく、収納に際しての現物勘会の場であり、かつ官人（五位以下）に禄を支給する時に、禄物を積み上げて分配するという官僚組織維持の上で重要な行事の場としても機能していた。

註１　『平城宮保存の先覚者たち』奈良国立文化財研究所、1976年参照。
註２　関野貞「平城京及大内裏に就て」(『建築雑誌』227号、1905年)。
註３　喜田貞吉「『平城京及大内裏考』評論」(『歴史地理』12巻３号、1908年)。
註４　昭和52、53年度『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1978、79年。
註５　『儀式』奉山陵幣儀条、『西宮記』班幣条など。
註６　『日本書紀』雄略15年条・継体10年５月条。

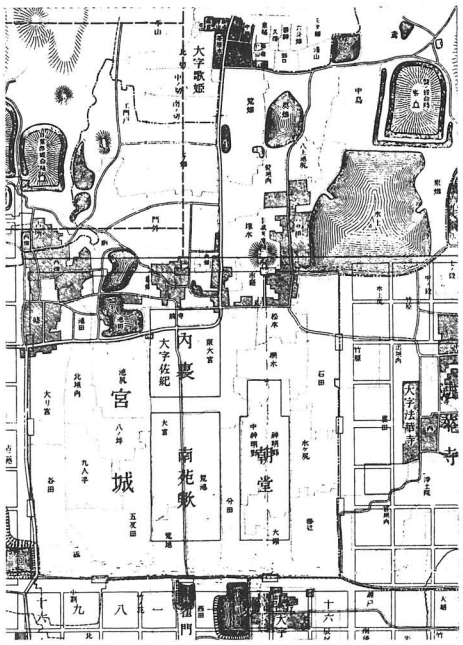


fig.25　関野貞・平城京及付近班田古今対比図
（『平城京及大内裏考』）

fig.26　推定松林苑南辺地築地
北側に空濠がある

fig.27　校倉の校木を使った井戸枠
平城宮跡第一次大極殿地区検出

3．結　語

今回の調査は、平城宮の北辺地域で実施した初めての大規模調査で、調査地は佐紀盾列古墳群の雄、市庭古墳の濠と外堤の推定地、奈良時代にあっては大蔵省倉庫群の占地に推定されるところである。調査内容は各章に詳しいが、成果としては、市庭古墳は予想外の二重の周濠をもつこと、奈良時代には墳丘を削って内濠を埋立てたこと、外濠は園池に転用したこと等を確認し、また平城宮所用瓦と同笵の瓦を多数得たことにある。当初予想した大蔵省倉庫群の占地を積極的に証する遺構は見出せなかったが、以上の成果から、調査地は宮に関係した公的な地域の一画と結論づけたいと思う。それではこの地域の区画はいかなる形で行なったのであろうか。東・南・西の三辺は手がかりがないが、北辺について注目すべきは「松林苑」南辺築地である。この築地は橿原考古学研究所が西南隅を[註1]、当調査部が西南隅から 320m東の地点を発掘[註2]し、規模は宮大垣と同じであること、方眼方位に対する振れは約N 0°10′ Wで宮の南面大垣とほぼ平行することを確かめた。当調査部の発掘地点では築地の北側に幅5.3m、深さ2.8mの空濠を検出。この濠の北側にはもう1条築地痕跡があり(fig. 7)、空濠の存在から、「松林苑」南辺築地と言われたものが、平城宮北面大垣との間の北辺を画する施設 の可能性もある。但し、北側の築地痕跡は東西いずれにも続かないこと、空濠は西南隅まで続かな いこと、また推定南辺築地自体、北に1km以上続く、「松林苑」西辺築地と接続することから以上の 想定はなお問題が残る。この点に関しては、西南隅付近に占地する猫塚の存在状態が解決の緒口に なると考えている。発掘成果から派生した問題の一つに市庭古墳後円部の現状がある。

従来、宮の 造営に伴って削平・整地されたのは前方部のみで、後円部――特に東側の削平は後世の宅地化によ るとされた。しかし、この見方は調査所見から否定された。現存の後円部中央が第二次内裏の中軸 線とほぼ一致する(fig. 7)ことからみて、宮造営時に計画的に整形したのであろう。この目的が何で あったかは、今後藤原宮や平安宮など他の宮と関連させて検討すべき問題であろう。

宮城北側に 苑地をおくことは中国都城に伝統があり、唐長安城では宮城の北に三苑と称する苑地があった。そ れらは大明宮の東南隅にあった東内苑、宮城の北に接した西内苑、これらを包みこむ形で広がる東 西27里、南北23里、周 120里[註3]の広大な禁苑（『大唐六典』『唐両京条坊考』）である。こうした制度を 日本がどこまで移入したか、日中都城制の比較上からも興味ある問題である。藤原宮では字名や出 土木簡から北側に苑地が想定され[註4]、平城宮では松林苑と推定される施設があって、その一端を受容 していた。今後、「松林苑」および宮との中間地帯にとどまらず、宮域の北側全体に調査を及ぼして ゆくことによって、こうした点も明らかにしうるのではなかろうか。

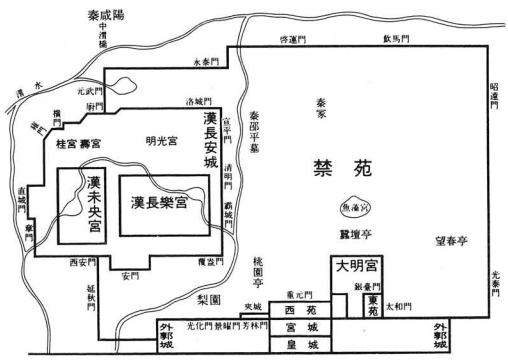


fig.28　徐松・西京三苑図『唐両京条坊考』
（平岡武夫『唐代の長安と洛陽』による）

註1　この成果は未報告であるが、調査を担当した河上邦彦、今尾文昭両氏に御教示いただいた。記して感謝する。

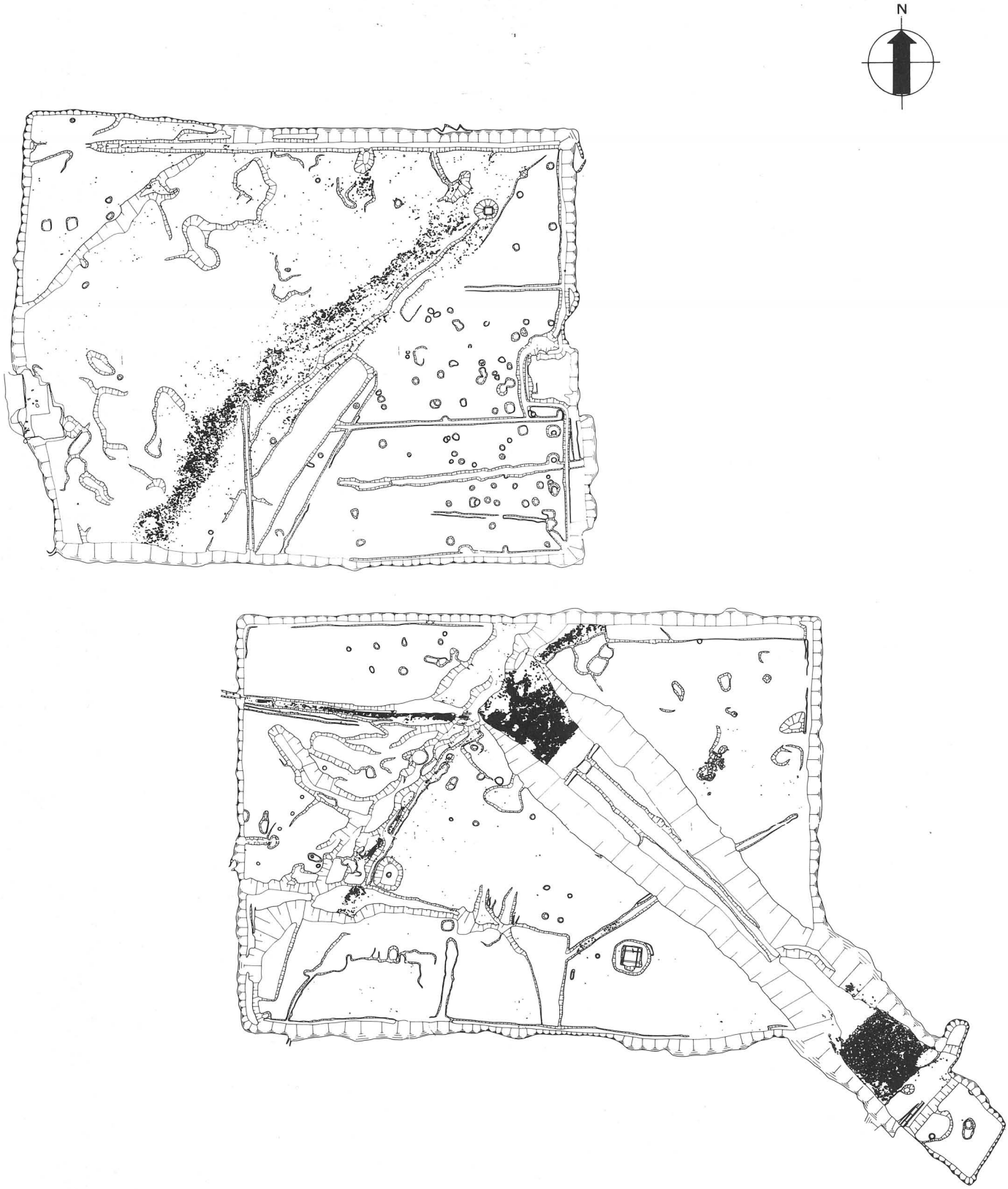
註2　『昭和55年度平城宮跡発掘調査概報』1981

註3　長安城は大程の里と大尺が使われたと推定。1尺＝0.294m、1歩＝1.47m、1里＝529.2m。平岡武夫『唐代の長安と洛陽』1956

註4　岸俊男「京域の想定と藤原京条坊制」『藤原宮』（『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第25冊』1969）他。

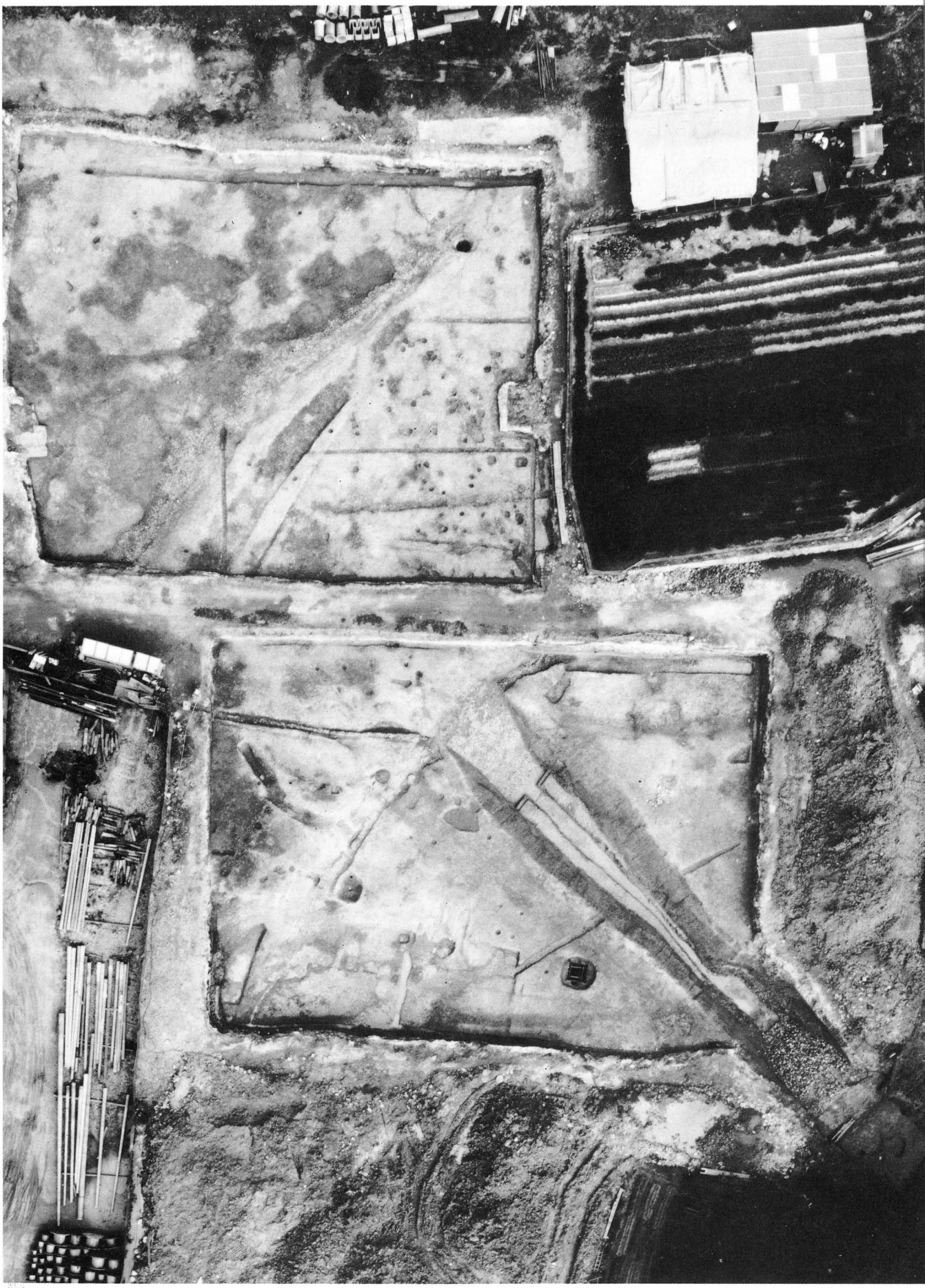
図 版

PL. 1 6AFV-J・K区全体図



1：400

PL. 2 6AFV-J・K区航空写真



PL. 3 発掘区全景

東南から

西北から

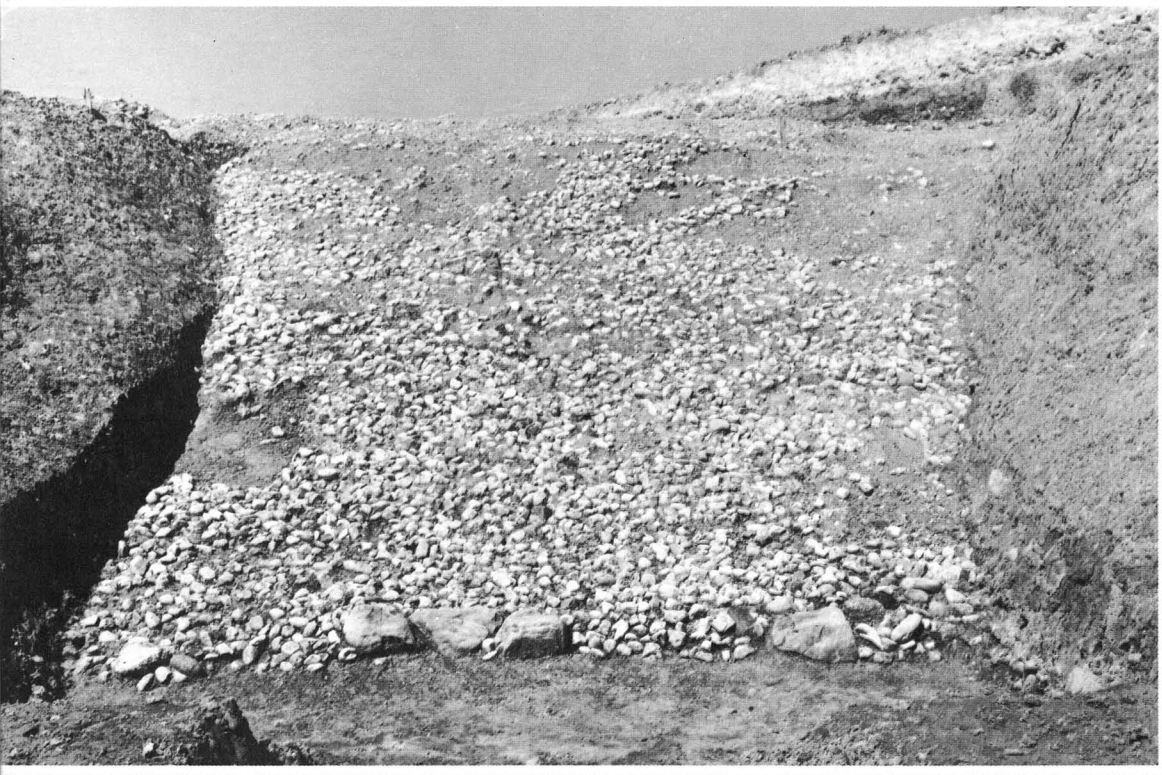
PL. 4 市庭古墳・周濠

SG2150

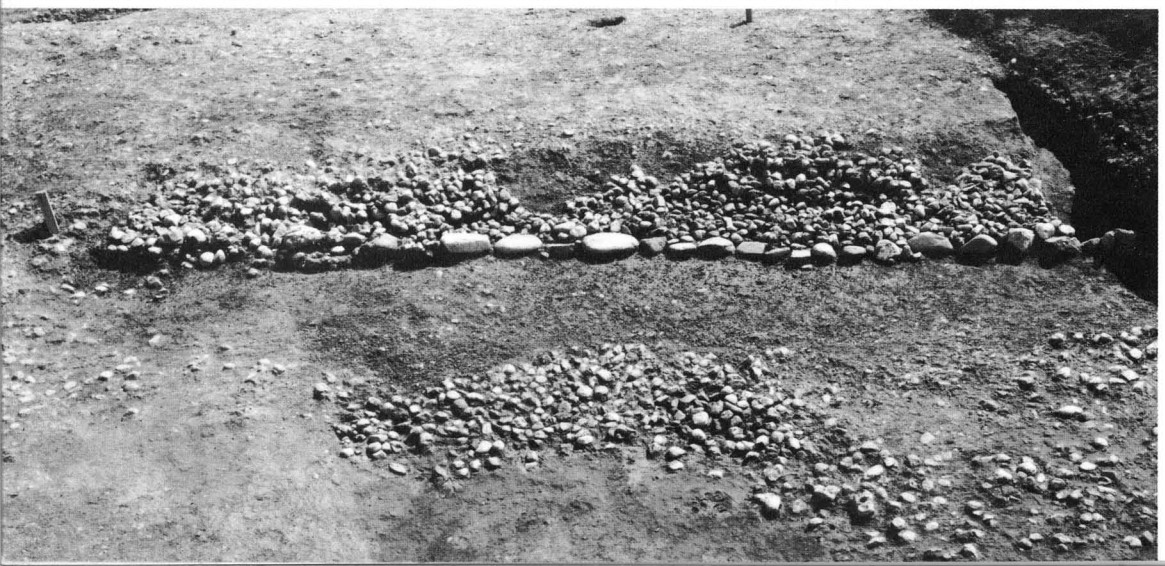
SG2160
SX2170

PL. 5 市庭古墳・葺石

SX2151（西から）

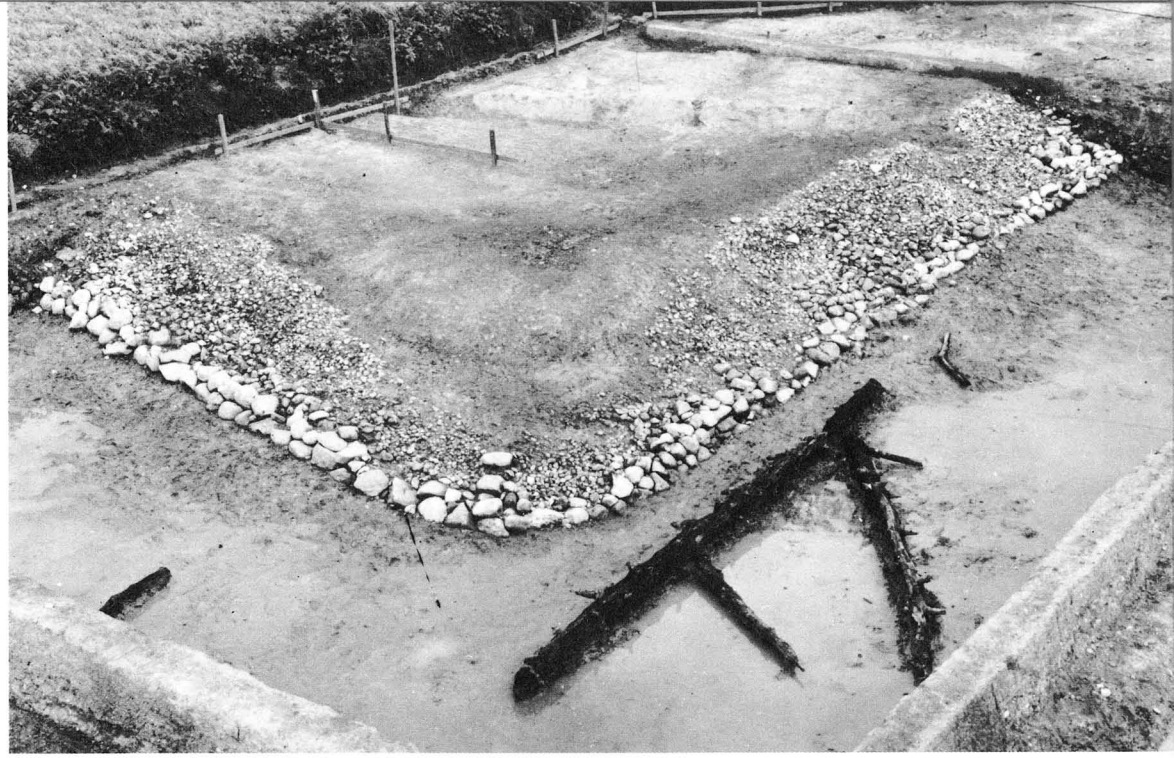


SX2152（東から）



SX2161（西から）

PL. 6 市庭古墳・葺石



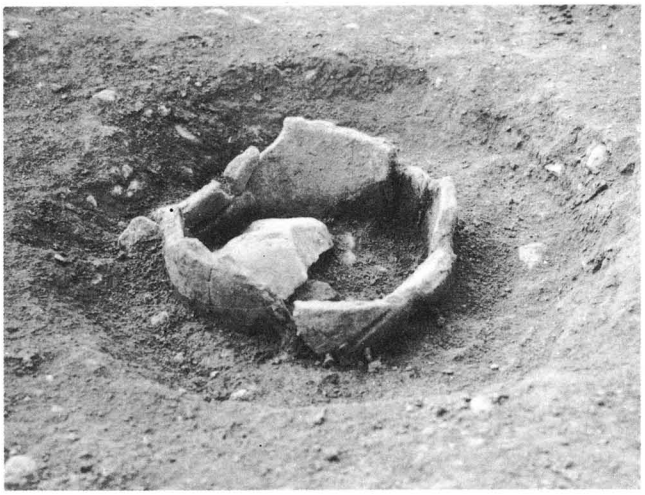
前方部東南隅
（東南から）

前方部東南隅
（東北から）

前方部南面外堤
（北から）

PL. 7 円筒埴輪列

左．東北から
右．西南から



PL. 8 奈良時代の遺構・全景

南から

西から

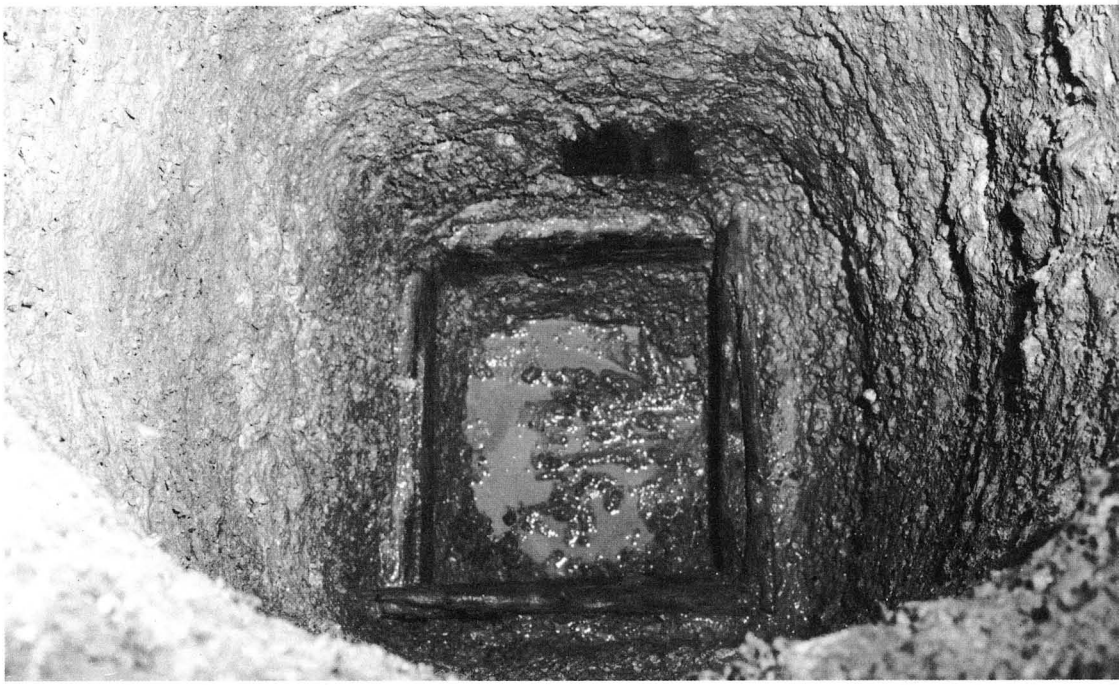
PL. 9 園　　池

北から

南から

PL.10 井戸・建物・暗渠

SD2157（西から）

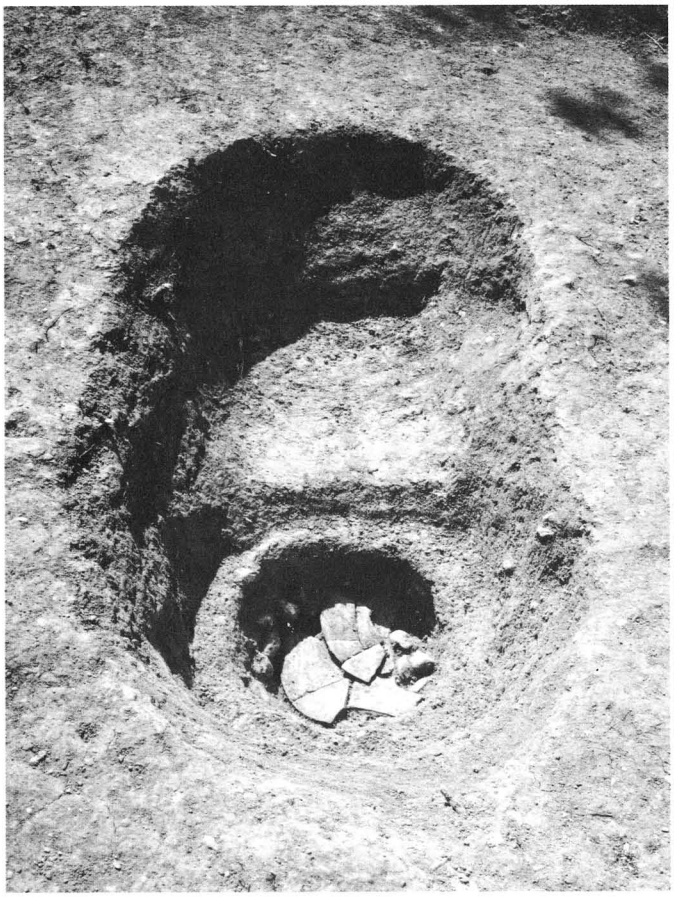


SE2163（東から）

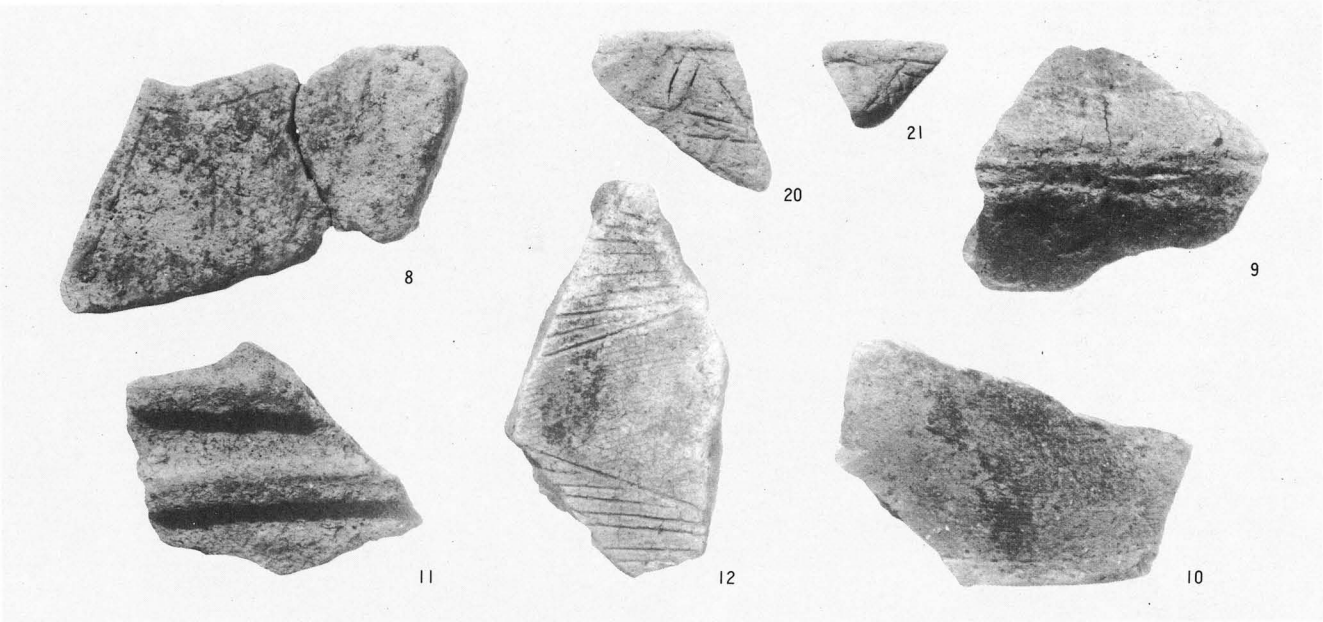
SB2165（西から）

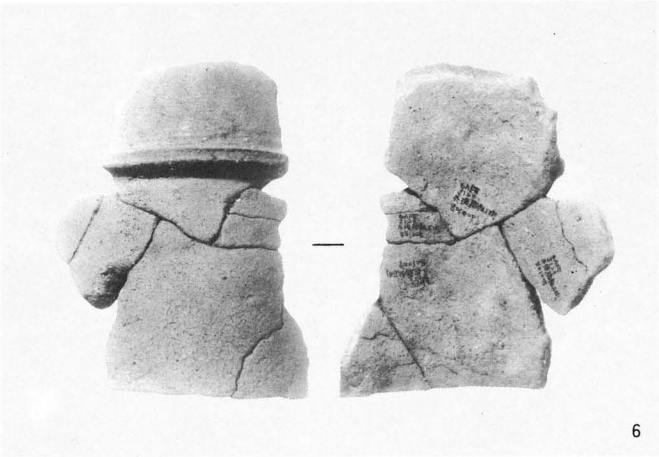
PL.11 土坑・溝

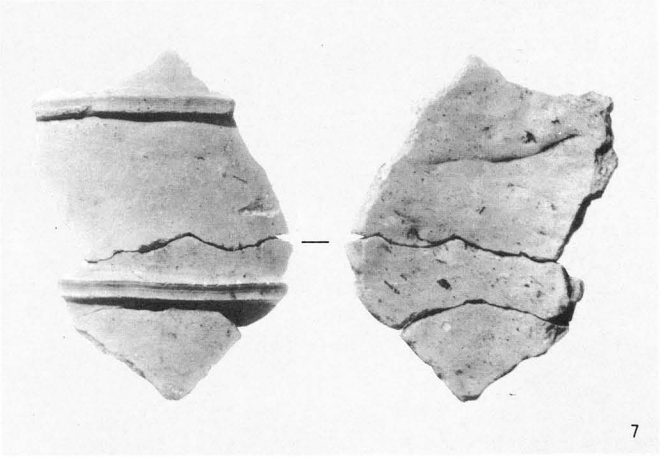
SD2167（左・東から、右・西から）

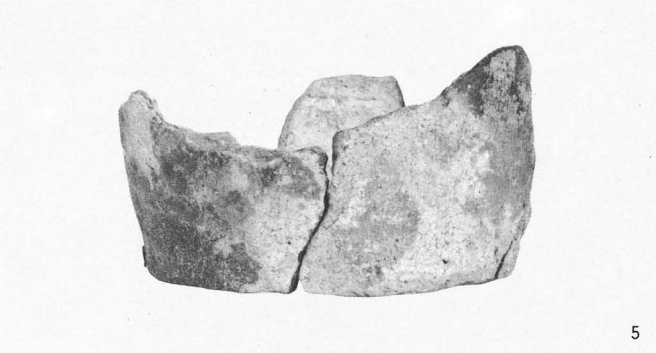


SK2158（左・北から、右、南から）









円筒埴輪(2～7・20・21)、形象埴輪(8～12)

PL.13 軒　瓦

6282－D
6721－E

6308－B
6663－A

1：2

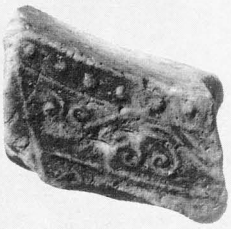
PL.14 軒 平 瓦

6641－F

6721－A

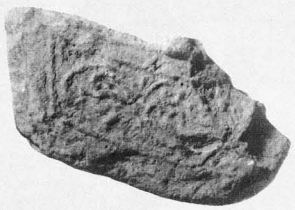
6664－D

6664－K



6641－C

6685－A



6732－P

6664－C

6641－E

6663－F

6726－E

6664－F

6663－B

1：3

PL.15 軒丸瓦・刻印・土器

6012A

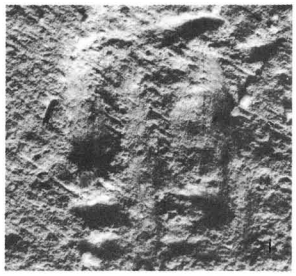
6225A

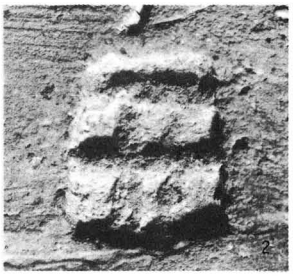
6135D

6284A

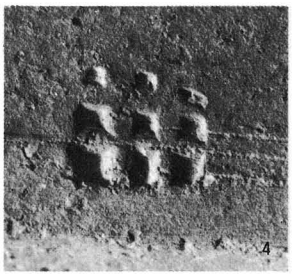
6308A

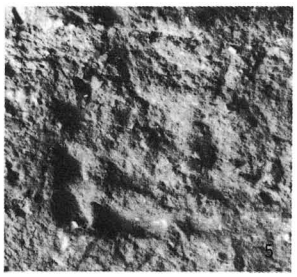
6308D


1


2

3


4

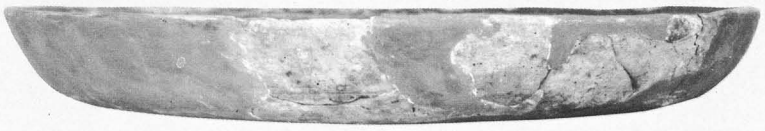

5

1

4

10

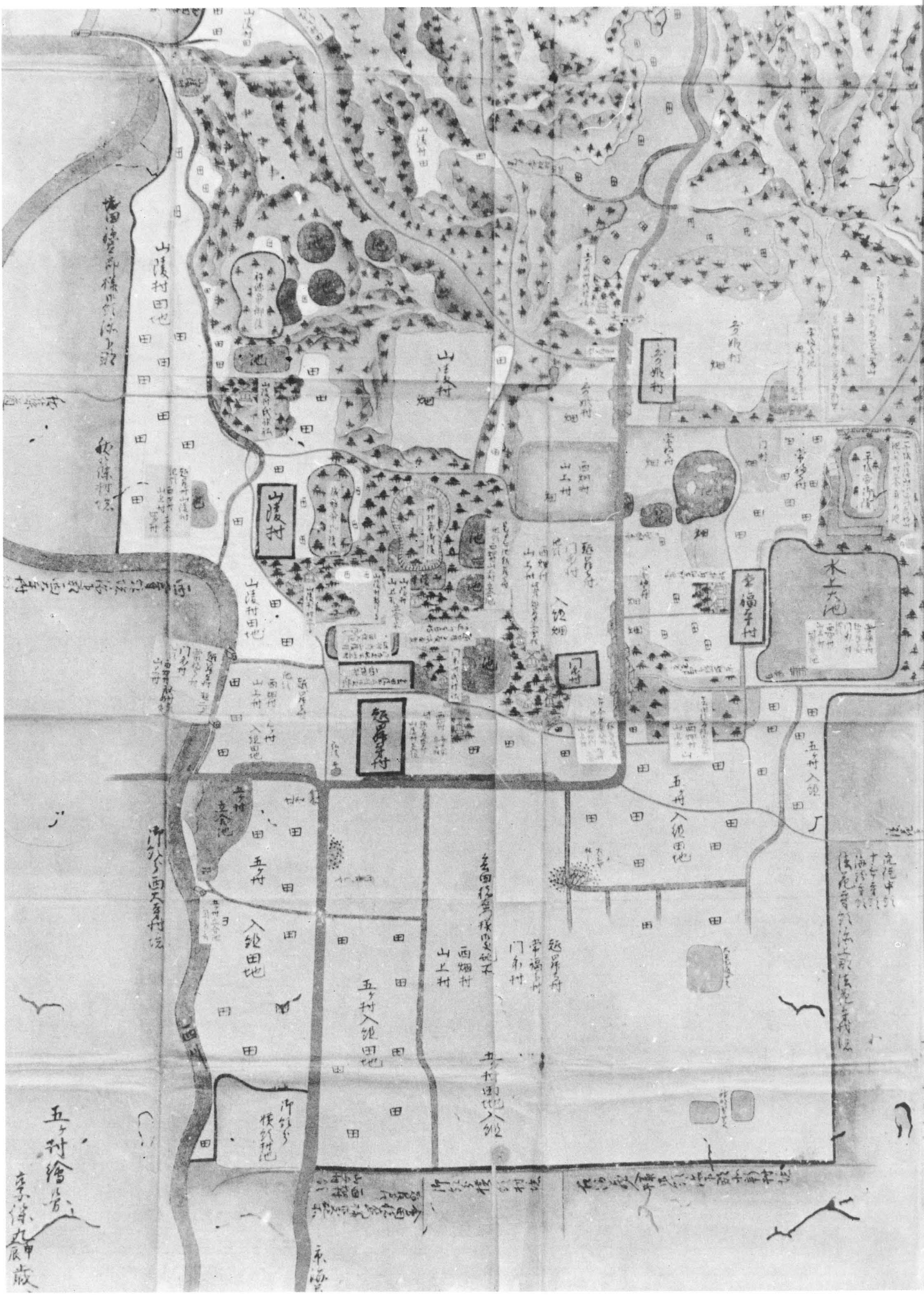
6


7

11

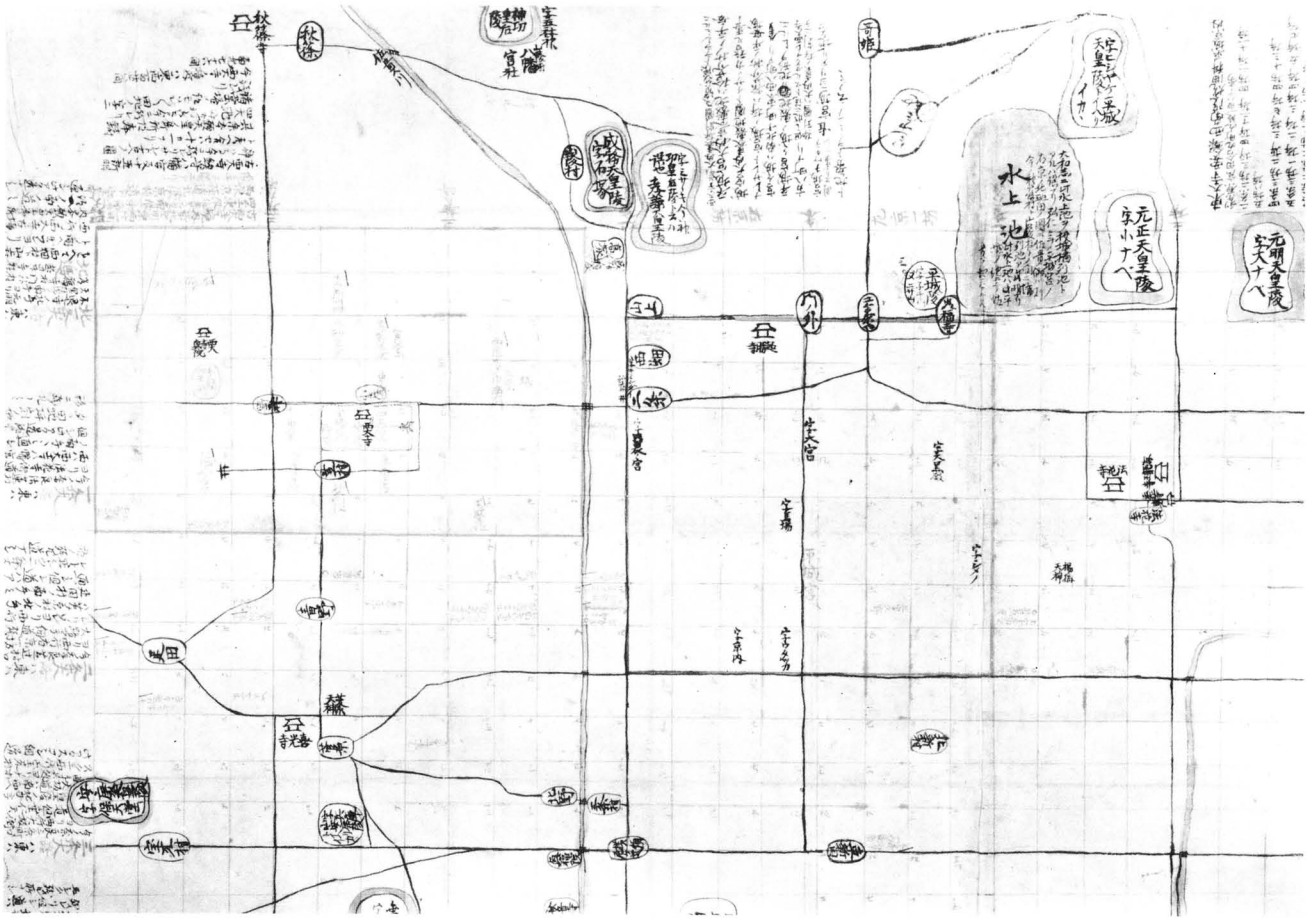
軒丸瓦1：3、土器1：2

PL.16 絵図にみえる宮北辺



五ケ村絵図（超昇寺・常福寺・門外・山陵・歌姫の五箇村の絵図、部分　1724年。
佐紀盾列古墳群の名称がその後の治定と異なっていることがわかる。）

PL.17 絵図にみえる宮北辺



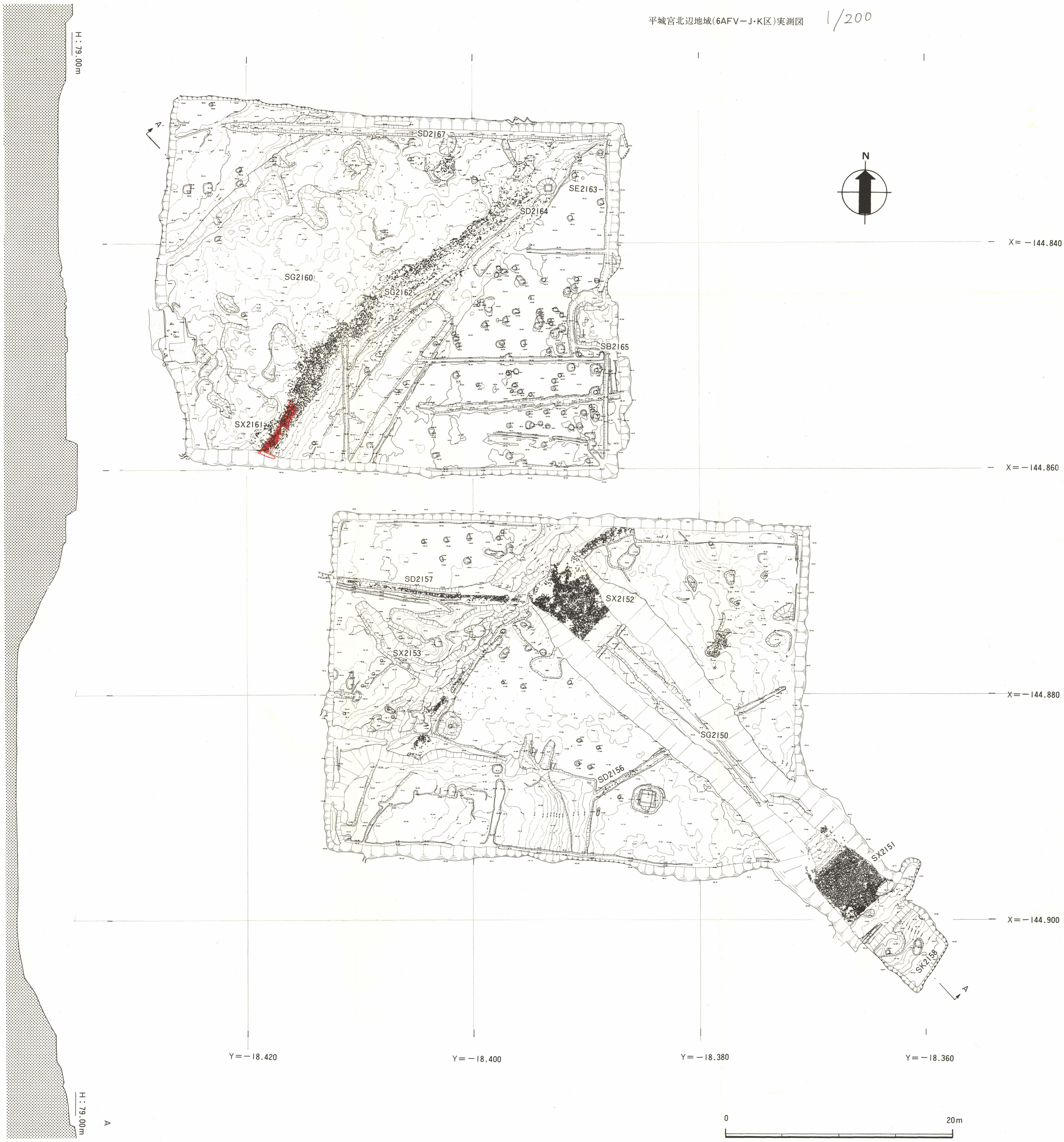
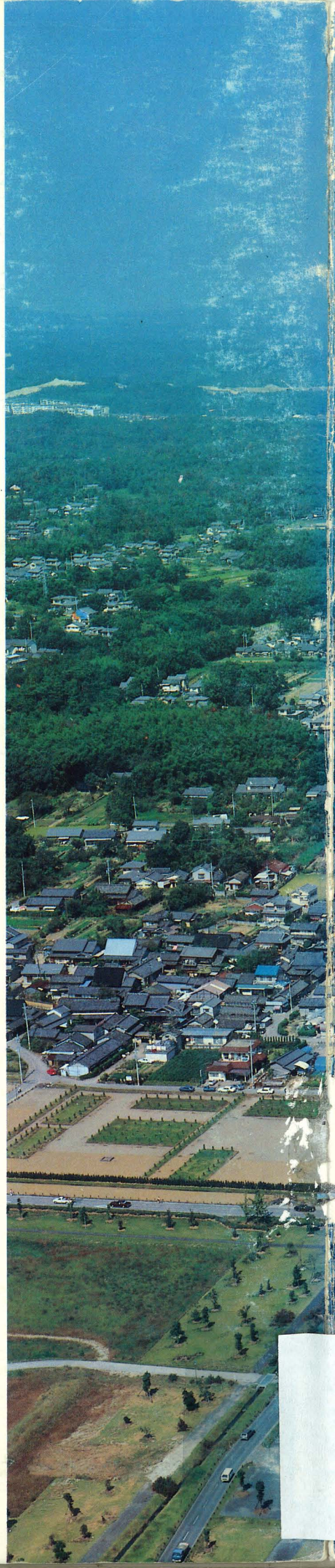
北浦定政・平城宮大内裏坪割之図（条坊の方格線及び地名を朱書している。1852年）

北浦定政・平城大内敷地図（斎藤拙堂が序を書いた図。1861年）

平城宮北辺地域発掘調査報告書

昭和56年３月25日　印刷
昭和56年３月31日　発行

編集発行　奈良国立文化財研究所
奈良市二条町２丁目９番１号

印　　刷　関西プロセス
京都市右京区山ノ内山ノ下町13

平城宮北辺地域(6AFV－J・K区)実測図　1/200